

日本人ボランティアと学習者との交流活動プログラム活性化のための
事例研究 ボランティアの視点から

安場 淳
馬場 尚子

0. はじめに

中国帰国者定着促進センター（以下、センターと略）では日本人ボランティアと中国帰国者である学習者との交流を中心とする一連の学習活動（ボランティア参加型学習活動）を随時行っている。その意義、実施の体制および実践状況については、当センター紀要第1号(佐藤他、1993)において既報であるが、ここではそれを踏まえてこの一年のセンターのこの活動を巡る動向について述べ、今後センターがボランティア参加者とのつながりの在り方を模索していく前提としたい。¹⁾

まず、昨年にも増して参加者数および参加団体が増加したことが挙げられる。これは異文化交流、日本語教育そしてボランティア活動への関心の高まりの現れといえるだろう。そして、参加者、特に何回かに亙っての継続参加者が増えるにつれ、彼/彼女らから当センターが得る正負のフィードバックも質量ともに増大した。

また、昨今の社会変化を受けて、センター内部からの変化として、日本社会に対する発信の場としてこの活動を位置づける視点も強調されるようになったことが挙げられる。帰国者を含めた異文化の住民全般を隣人として受容していく方向に向けての社会の変化が起こるのをただ待っているのではなく、我々日本人が彼らに対して隣人として取るべき態度や行動を考えるきっかけとして微力ながら発信していきたいと考えるようになったのである。

そこで本研究では、この活動への継続参加者を対象に参加ボランティアにとってのこの活動（センターでは実習と呼んでおり、以下これに倣う）の意義およびその実現のための方法改善について取り上げることとした。なお、紀要第1号時点で今後の課題とした学習者/教授者による評価制度の改良については現在実践の途上であり、追って別途報告することとする。²⁾

・目次

日本人参加者にとっての交流プログラムの意義と問題点
実習参加の制度と継続参加の状況
継続参加者の得ている動的情報（事例を中心に）
事例にみるプログラムを巡る問題点

・日本人参加者にとっての交流プログラムの意義と問題点

1．動的情報の生成の場としての異文化間コミュニケーション

初めに、前提となる基本的な理念を確認しておきたい。

日本社会は急速に「地域社会の国際化」時代を迎えているが、これを促進した要因として「交流の双方向化（出ていく／入ってくる）」および「期間の長期化（一時的な滞在のみでなく）」、「交流の担い手の多様化（一部のエリートだけではなく）」の3つが指摘されている(井下、1992)。その1側面である「入ってくる国際化」により在日外国人住民が増加し、今日、日本人の誰にとっても異文化と接することが日常的なこととなりつつある。今後も異文化の受け入れは様々なレベルで誤解や摩擦、矛盾を生じつつも不可逆的に進んでいくと考えられる。このことは、どのように異文化に対処していけばいいのか個人から地域社会、自治体そして国家のレベルにおいて日常的に問われるということである。

渡辺文夫は、異文化との接触で問われる能力を関係志向的ストラテジーを中心に据えた「統合的關係調整能力」(略して異文化間能力と呼んでいる)と名づけた。そして、「異文化との接触の機会の少ない日本社会ではこの能力はほっておいて形成されるものではないし、教室で話を聞いただけでできあがるものでもなく、その育成のためには経験学習を中核とした教育プログラムが日常教育に根ざした形で行われる必要がある」と説いている(渡辺、1991)。渡辺の言うように、日常生活の中で異文化との接触から体験的に異文化間能力を習得できるような場が求められているだろう。

そのような場はどこに、どのように実現可能だろうか。ここで我々は、すでにボランティアを中心として頻繁に行われている地域における異文化間交流または援助の取り組みに注目したい。ボランティア活動は個人の自発的な

意志に支えられている。ボランティアは奉仕であるという認知がなされがちであるが、本来それは、自己とその関わる相手との間に何か形にならないあるいは金銭に換算できないものを生み出そうとする意志である。そこで生み出されるものを金子は静的情報に対比させて動的情報と呼んだ(金子、1992)。静的情報とはすでにどこかに貯蔵されて「あるもの」で、それを手にいれるためには対価が必要なものである。これに対して動的情報は人と人の関わり合い(相互作用)の中から「生まれてくるもの」で、その価値も固定された静的なものではなく、その場で新たに発見されるものであるとされる。このボランティア観は異文化間能力を考える上で有効なものと考えられる。

動的情報は相互作用の中から生まれるものであるから、一方通行なものではあり得ない。日本人と異文化の人との関わり場においても、日本人が動的情報を得ているのであれば、それは同時にその異文化の人もそこから動的情報を得ていることを意味する。異文化間交流/援助のボランティア活動はそのような相互作用の場として位置づけられるだろう。そうした場を作り出す能力こそが渡辺のいう、異文化間能力の一つではないだろうか。

草の根で地道に活動を続けてきている異文化間ボランティア・グループで共有されているそのような場は、まだ活動に関わっていない地域住民がボランティアとして加わることで異文化間能力を共に学習する場となっていくことができるのではないかと思われる。

今後、異文化間交流/援助のボランティア活動は、この意味でもより重視されていくべきものと考えられる。そして、異文化の人と関わる国内の教育機関には、機関外部の日本人にボランティアとして関わってもらい、その場を通して異文化間能力を相互に学習する場を提供することが今後、より求められるのではないだろうか。

日本社会のこの変化の中で、センターも学習者と受け入れ側日本人との相互学習の場として地域社会に開かれた存在でありたいと考えるようになった。ただし、センターが預かっているのは中国帰国者であるから、当然ながらまず帰国者と日本人との関わりに焦点を当てることになる。

中国帰国者とは日本社会にとってどのような存在であろうか。彼らは在日外国人の枠にはおさまりきれない「日本」を内に抱えた昭和史の生き証人で

ある。と同時に、日本社会という水に投げられた異文化の一石でもあると位置づけられる。帰国者の帰国促進 / 受け入れに関する行政的対応のあり方は在日外国人のそれと全く同列に論じることはできないが、日本社会にとっての内なる異文化という点で在日外国人とも共通のものを持っている。

ところが、日本人一般の持つ帰国者イメージは、肉親探し調査の報道などが与えた「かわいそう、暗い、大変」な日本人等といった一面的なものであることが多い。これに中国人に対するステロタイプのイメージが加わる場合もある。特に所沢市の地域住民の中には、直接間接の接触から帰国者に対して否定的イメージを抱いている人もあるという。また、買い物中に日本語がわからなくて困っている学習者を見かけたりしていても、何となく敬遠してしまう人もある。いずれにせよ、地域社会はメディアを通してだけではなく、帰国者との直接の接触があることが大きな特徴である。もちろん、無関心な人はもっと多い可能性があるが、本来、直接接することができる距離にあるということは相互に動的情報を生成する場を作る可能性も開かれているということである。

ただし、これに関しては、いわゆる接触研究の結果や「メディアから得た否定的イメージに基づく態度が実際の接触によって変容を受けた場合も、その後のイメージ再構成にメディアが再び関与しており、『百聞は一見に如かず』とは言えない」という御堂岡(1992)が示すように、異文化との接触の機会さえあればその文化の人に対する肯定的な態度変容が起こるというわけではない。それに関与する要因のコントロールが必要となる。

さらに、真の内なる国際化は、受け入れ側と異質な他者とが生活者としての相互の関わりから生じる異文化間の誤解や摩擦を調整 / 受容していくことによって達成されるものである。ところが、センターの学習者の場合は生活者として地域社会にあるのではない。宿舎に住み、その間の生活を保障されて研修を受けるだけという半ば宙に浮いた存在である。ということは、学習者が本当に生活を始めれば避けられない異文化間摩擦の生ずる機会も限られる。このような環境下では、地域の日本人との出会いの場を設けても、そこで双方に習得されるだろう異文化間能力も限られたものでしかない。

しかし、少なくとも今まで異文化の人と直接接したことがなく、興味はあ

ってもそれほど積極的に行動を起こしてこなかった日本人にとっての生の異文化と接する入り口としてなら、センターも少しは役割を果たすことができるのではないだろうか。それができれば、帰国者という異文化の担い手との関わりから始まって、日本社会の望ましい「内なる国際化」にほんの少しは貢献できるのではないだろうか。このような理念の下、センターは外部（特に地域社会）に向けて学習者との交流の場をより開かれたものにしていくことを始めた。

2. 当センターが実習参加者に期待するもの

それでは、センターは地域社会に対し、どういった働きかけが可能なのだろうか。まず、現在実施されている交流活動プログラム3)にその可能性あるいは限界を探ってみたい。

センターは交流活動プログラムにおける学習者の教育目標の領域（紀要第1号に準ずる）を、

日本語を第一言語とする相手との日本語によるコミュニケーション力

日本の社会経済文化的な事象や制度に関する背景知識

（日本という）異文化環境と自己との調整を行おうとする態度の3つに設定している。⁴⁾

これらは日本人参加者との相互作用を通して体験的に学習されるものであることから、上記の目標は各々の領域における動的情報を学習者が得ることであるとも言え替えられる。

動的情報生成のプロセスは相互的なものであるから、日本人側参加者（以下、特に断らない限り参加者といえれば日本人側参加者を指す）に対しても上の3つを裏返した、

日本語を第二言語とする人とのコミュニケーション力

センターや帰国者、中国・中国人のイメージの脱ステロタイプ化とこれらに関する背景知識の獲得

（中国という）異文化を受容しようとする態度

の3領域における何がしかの動的情報の獲得が期待される。

は言語的あるいは非言語的な手段を用いて動的情報をやりとりする「場」を作っていく力と言い換えられる。たとえ日本語しか話せない参加者であっても、また学習者の日本語がかなり不十分であってもコミュニケーションを可能にする手段や方法の学習と同時に手段や方法の工夫によってそれが可能であるという、コミュニケーションへの積極的な態度の学習を期待している。ただしセンターの場合は学習者は全員中国語話者であるから、漢字という文字媒体に頼ることが概ね可能である。この場合、より効果的な筆談の方法も習得されることが期待される。

ではマスメディアから注入されたステロタイプの帰国者や中国/中国人イメージ、また当センターが地域社会に立地することから生じている、帰国者およびセンターの否定的かつ一面的なイメージからの脱却が期待される。

は、中国という、文化（「ものの感じ方考え方行動の仕方」と規定する）の異なる世界の人と接することによって、異質なものととの動的情報の生成の喜びや異質なものに対する受容性が得られることへの期待である。

ボランティアの場合、これらに加えて「ボランティア」に対する態度そのもの、すなわち「奉仕」ではなく動的情報の生成が可能な関係という、ボランティア観の形成が必要であると考え。は ~ 領域での学習の動機づけをする態度であるが、参加者の多くはもともと一定のボランティア観を持って実習に参加してきているので、その変容は容易ではない。にも拘わらずここに掲げたのは、従来多数派であった「ボランティア=奉仕」観が却って上の ~ 領域での動的情報の獲得を困難にし、また生活の中で帰国者や外国人住民とサポートをやりとりすることを非日常的なものとして位置づけてしまいかねないと考えためである。（サポートのやりとりという考え自体が上の奉仕観に則れば存在せず、サポートは一方的に日本人側が与えるものということになってしまう。）

ではセンターは、どのような根拠に基づき、どのような方法で参加者に対してこれらの領域での動的情報の獲得が多少なりとも可能なのではないかと考えているか。これについては学習者に対してと同様、体験とそのフィードバックからの学習(安場他,1990 を参照されたい)によって動的情報が獲得されることを期待している。領域別に述べると、はほとんどの場合、参加者

がとにかく「慣れる」ことを当てにしている。初めは戸惑うかもしれないが、時間がたつにつれ、また回を重ねるにつれ習得されるだろうという期待である。実習中に生じる参加者と学習者間のコミュニケーション・ブレイクに対しても、両者で何とかして解決の手段/方法を見いだしてもらうべく、教授者は極力介入を避けている。

についてはまずは、「百聞は一見に如かず」、実際に帰国者学習者と接することによって一面的でないイメージを得ていってくれることの期待である。

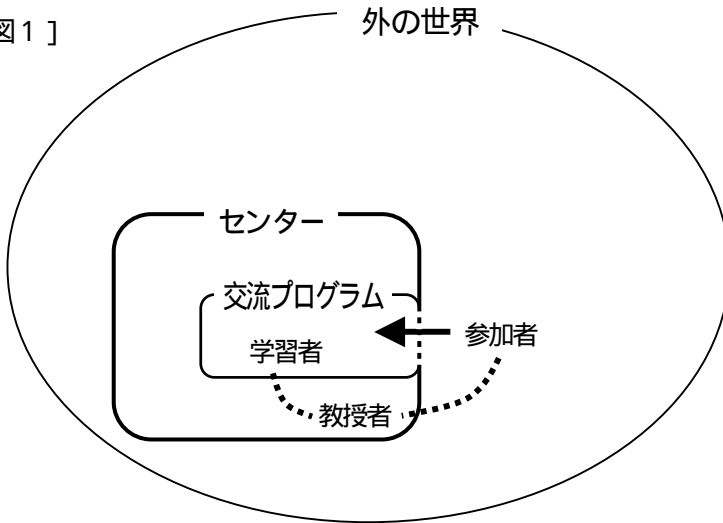
は態度あるいは実存的な領域であり、達成は容易でない。しかもまだ日本で実質的には生活を始めていない学習者と実習時間に接するだけでは、参加者側が異文化摩擦や誤解を体験する機会は得られにくいので、体験的な学習の機会自体少ないのであるが、実際に参加者が学習者という異質なものととの接触に慣れることによって異文化受容が多少なりとも促進されればと期待している。また、体験的に異文化を意識する機会の少なさを補う手段として、言語的コミュニケーションによって動的情報を生成する場を作ろうとしている。日本と中国の文化の違いの背景を通訳を介して話し合う座談会形式の活動がそれである。

は参加者が ~ の動的情報を学習者との間に生み出していることに気づくことによって初めて可能になる側面を持っているのではないかと考えられる。つまり、は ~ を支える前提であると同時に ~ によって変容が促進されるという循環的関係にあるのではないかと考えられる。

3. このプログラムをめぐる問題点

このように参加者に対する「期待」はある。しかし、参加者はセンターの教育対象者ではなく、参加者をセンターの学習者として扱うことはできない。また、学習者は研修中、担任の設定したプログラム全てに原則として参加することになっているが、ボランティアには参加依頼を断る自由があるし、またプログラムの全過程に参加する立場にもない。したがって、この期待はあくまでも期待であって教育目標とはなり得ないものである。

[図 1]



これは、このプログラムの存在そのものが [図 1] のように、センターという「学校」装置とその外の世界との接点にあるために起こることである。プログラム全体としては教育プログラムでありながら、参加者が外の世界に属しているがために、センターが参加者に対して教育的に関与することは制限される。逆に、参加者側から見れば、参加者はセンターという「学校」の外にある存在でありながら、教育的に「演出」されたプログラムの中でしか学習者と出会うことができず、教授者からの何らかの関与を受けるということになる。

外的世界に属している日本人とセンターとの実際の接点にあってネットワーク機能を果たしているのは、センター内にある実習参加システムである。ここでも、外の「現実」世界をどのようにどの程度センターという「演出」装置の中に引き込むのが問題となる。また、実習に参加するという形を採らない、センター外の世界とセンターの関わりもあり得るだろう。

このように、プログラムを巡る外部との繋がりに関しては、
 1)プログラム自体、2)外的世界とプログラムとの関わり、3)外的世界とプログラムを超えたセンターとの関わりの3つの側面がある。そこで、本節ではこれらの各々における問題点ないし課題を挙げていくこととする。

1) プログラム自体の問題

a. 場の虚構性

学習者と参加者によって共有される「場」はプログラムの設定下で実現するものであるが、それは現実の生活では起こりにくい「出会い」の演出であり、何らかの不自然さを伴うものである。

不自然さには二つの側面がある。一つはセンターが演出をするという面である。一般に二人の人間で一緒に何かをしようとする場合はその当人たちが何をするかを定めるものである。しかし、実習の場合は教授者と学習者の間で準備が進められており、学習者の自発性に則って計画が進められるとはいえ、多くの場合は教授者が予め引いておいたルールに乗った上での選択によって行なわれるものとなる。

「演出」には、異文化摩擦的な体験の「演出」も含まれている。たとえば青年の場合、喫茶店でお茶を一緒に飲む実習において、お茶代の支払いを中国文化では許容されにくい「割り勘」にし、学習者に日本文化の一つの行動の仕方に接してもらうことを活動の中に含めている。

不自然さのもう一つの面は、現実にはあり得ないような人工的な設定に参加者と学習者を放りっぱなしにしておくという仲介役割の不全さである。たとえば、共通項を予め持たない見ず知らずの二人の人間がいきなり対面して茶飲み話をするなど実際にはあり得ないわけだが、センター実習では間に教授が入ることでそれが行なわれている。しかも、ふつうなら仲介的な役割を果たす者は双方を紹介し、仲がうまくいくようにとあれこれ気配りをするものであるが、ここではそれも当人たちに任せて教授者は極力介入を避けている。実はこれも仲介をあえてしないという意味で演出の一つといえる。しかし、これこれの興味が共通だからこの二人を会わせようという意図に基づく演出ではないため、両者が共通のものを見つけていける保証はないのである。これはほとんど確率の問題となる。

実習が虚構の上に成り立っていることに起因するこれらの限界に対して、センターとしては必要悪としての演出という方針をとっている。つまり、両者を出会わせておきながら何の仲介も行なわないという演出は、当事者たちが共通点を何とかして探っていこうとする力を双方に体験的に学習していっ

てもらふことを目的としたものである。

「演出」については、たとえ「演出」であってもその間ともに過ごし、一緒にやることがあれば、共有するものが何か生まれるのではないかという考えに基づいて演出をしている。異文化摩擦体験の演出については、すべての日本人がいつも必ずそうするというわけではない行動をあえて参加者にとってもらっているが、それは日本人はみなこうするのだから学習者もそうすべきだと教え込むためではない。両文化間のトラブル事例の蓄積の中から摩擦や誤解を生ずることが知られているものを学習者に体験してもらふことで、異文化との調整能力の体験的な学習への契機としてもらおうとして行なっていることである。

もともと「学校」の存在の本質が、学習を効率的に促進するための「演出」装置であることを避けられないものである。学習の効率化のためには、現実には必ず起こるとは限らないことや起こり得ないこともあえて行なわざるを得ない部分がある。センターにおいても、現体制の下で4ヶ月の間に学習者と参加者に出会って動的情報を得てもらおうとする以上、不自然さを含んでいようと出会いの場を設定していかざるを得ない。

問題はその演出が参加者という「学校」外の人間に及ぶときに生じる矛盾である。その矛盾が動的情報の生成を妨げるほど興をそくものであり、参加者学習者の双方を不安に陥れるだけなのであれば、これはプログラムの存在理由そのものに関わる問題である。また不自然さに対してセンター側が無頓着になっていて、必要以上の不自然さが行なわれている恐れもある。たとえば、仕組まれた異文化体験がどの程度学習上有効なものか、有効であったとして教育の倫理上どの程度まで許容されるものか等は検討していくべき問題である。

b.カリキュラム全体におけるこのプログラムの位置づけ

外部の日本人との交流プログラム全体は、センターの4ヶ月を通したカリキュラムの中に適切に位置づけられることが必要である。具体的には、どの時期にどのタイプの活動をどの程度行うかについて学習者の適性やパーソナリティ、学習進度、達成目標に照らし合わせて適切な選択を行うことである。

c.活動タイプあるいは一つの活動タイプについてのプログラムの適切化

実習の場から参加者学習者の双方が動的情報を得られるかどうかには、学習者の日本語力や参加者の動機、両者のパーソナリティ、教授者の指導方法など様々な要因が関与しているだろう。しかし、動的情報の得られやすい、言い換えれば共通のものを見つけやすい活動と見つけにくい活動のタイプがあることは事実である。たとえば、「自己紹介的な話題で会話する」活動は実習の活動タイプとしては最もポピュラーなものであるが、ただ話す以外にない設定であることから、話すことがうまく進まないという動的情報に結びつかない活動でもある。共同作業や外出といった実質行動主体の活動の方が、教室での会話よりは話題を共有することが容易だろう。しかし、こうした活動は物理的な負担や制約が多い。負担のより小さい活動を案出することも検討したい。

また、教室での会話という活動がただ話すだけだから動的情報が生まれにくいというのでは、この活動はプログラムとなり得ない。学習者に対するコミュニケーション力の指導やコミュニケーションの補助手段の準備次第で参加者学習者の双方に得るものの多い活動となし得るはずなので、これはプログラミングの課題である。

一つのプログラムについても、カリキュラム全体と同様、学習者の適性やパーソナリティ、学習進度、達成目標に適したものである必要がある。

d.活動の「場」の臨機応変な運び方

活動に至る準備段階を経て、実際の活動の場では教授者が予定外の事態に対して臨機応変に対応できることが必要となる。

特に座談会形式の活動の場合、座談会の場から双方が動的情報を得られるようにするには双方が共通の興味関心を持って話せることが必要である。そのためには司会者（教授者が担当する）が各々の参加者の手持ちの話題やコミュニケーションスタイル、個人的な背景事情などをある程度把握し、かつ談話の流れを臨機応変にコントロールできなくてはならない。しかし、そうしたいいわば司会術については未解決の問題が多い。また、全ての教授者がそれを習得することは実際には不可能である。

現時点における対策は、呼びかけ担当者がセンター側で把握している限りのボランティアと学習者の個人的背景を考慮し、できるだけ学習者との間に動的情報を生成しやすいボランティアに声を掛けるようにすることと、司会の技術向上のために会の模様をビデオ撮影して司会者と通訳とで行なうフィードバックであるが、特に後者の態勢はまだ充分とはいえない。

e.参加者の日本語によるコミュニケーションへの欲求と期待

せいぜい4ヶ月研修を受けた学習者の日本語力では、ジェスチャーや筆談を交えたり他の補助手段を用いたりしても、話題は限られ、微妙なニュアンスまでは理解できないし伝えられない。特にすでに平均年齢が50歳を超える孤児世代の学習者の日本語に急速な伸びはあり得ない。しかし、そのことにもどかしさを覚える参加者は少なくない。

この一つの原因は、日本語によるコミュニケーションに対する参加者の期待が高いことに求められる。特に外国人と日本語で話した経験が少ない参加者の場合、外国人とのコミュニケーションにおいても日本語ネイティブと話すときと同じ程度にまで理解し合えることを期待するだろう。参加者がそのような期待を持っていなかったとしても、コミュニケーションへの欲求があれば、フラストレーションが残る。

センターでは、学習者側に対しては、「日本語が不完全でもコミュニケーションできることを知ろう、またそのための技術を身につけよう」という目標で指導しており、参加者側に対しても学習者の日本語力への理解を求めるようにしている。しかし、参加者の日本語によるコミュニケーションへの欲求と期待も考慮する必要があるだろう。

f.センター教師の異文化に関わる態度

異文化に対する受容的な態度については、参加者にとってのその困難を云々する以前に、我々センター教師自身にとってもこれが達成困難な目標であることの自覚が必要だろう。センター教師間における「異文化適応教育」の方針の徹底ないし共通理解が得られていないことが、実習からの参加者の動的情報獲得を左右する場合があります。(のBのケース参照)

g. 評価の妥当性と信頼性

現在は、参加者のプログラムに対する評価システムとして、実習後の質問紙調査と担当教師との感想会を実施しているが、参加者の拘束時間、煩雑さを考えると質問紙方式の量と内容を検討しなければならないだろう。特に、高齢の参加者に対する質問紙形式の簡素化も意識しなければならない。一方で、参加者の個別の評価をもらうためには質問紙形式は有効であり、無駄のない方法を考えていくことが今後の課題である。

また、現時点で十分な項目分析を経ていない項目の妥当性についても検討を要する。質問項目の中で参加者が実習参加を通じて何らかの「気づき」や「発見」があったか、また、学習者にとっても同じような「気づき」「発見」があったと思うか、という項目があるが、この回答に関して質問の意図が伝わりきっていない点が見られる。センターとしては、実習の中で中国（中国人）についてでも、帰国者についてでも、あるいは、個人的なことでも何らかの新しい情報（動的情報）を得たかどうかを問いたいのであるが、回答記述の中には、参加者は学習者と自分自身との違いを見いださないことが是であるというような受容の態度を示すことがあり、質問項目自体をマイナス評価の基準と取っているようなケースが多々見られる。また、学習者の「気づき」「発見」についても参加者の謙遜が見られることがある。このように質問項目については、その妥当性、そして、回答の信頼性を高めていく必要がある。

2) 外の世界とプログラムとの関わり

a. システムの受動性の改善

参加者には日本語教育や異文化間教育の研修の一環としての団体参加や、卒論やレポートや専門分野に対する興味からの個人参加が多い。これは実習参加者の確保と外部の問い合わせに対する対処として、センターに興味を持つ人々を実習参加の対象としてきた経緯によるため、その意味ではセンターは受け身的であった。もちろんこのような参加者も、センターや中国帰国者に対する理解を深めてもらうためには貴重な存在である。しかし、学習者がそれぞれの定住先で実際に交流していく相手は、近隣の人間や職場におけ

る同僚等、帰国者や異文化を持つ者の受け入れに対する準備のない人々が多いと考えられる。そうであるならば、参加呼びかけもそのような性格を持った地域住民に対して積極的にやっていくことが現実的であろう。5)

b. 参加者の動機やパーソナリティ特性（対人接触態度）への配慮

参加者の持つ様々な動機と実習の目的や方法が合っていないと、動的情報の生成は難しい。呼びかけ側としては極力この点に配慮して参加を呼びかけているのだが、個々の細かい要望には対応しきれない面がある。また、実習の目的上、受け入れられない要望も出てくる。以下に問題事項を挙げる。

・中国語力

本来外国人とのコミュニケーションでは互いに持てる手段を駆使してコミュニケーションを図ればよいはずである。しかし、センターの目標の一つが学習者に日本語でのコミュニケーションに対する自信を持たせることにある以上、中国語でのコミュニケーション場面を作らないようにせざるを得ず、中国語ができる参加者にはできないふりをしてもらうことになる。しかしこれはかなり不自然かつ困難なことであるだけでなく、互いに拙いながらも相手の言語でコミュニケーションを成立させる喜びを奪うことにもなる。

呼びかけ側では、中国語が挨拶程度以上にできる人は日本語中心の活動には極力誘わないようにするとともに、媒介言語の使用に制約のない座談会等の活動への参加を呼びかけるようにしているが、たまたま中国語ができる参加者が団体参加で日本語中心の実習に入ってしまうことは起こる。

・日本語教育

逆に、参加者がコミュニケーションへの欲求なしに学習者との会話を言語形式の練習とのみ捉えて参加することも多い。

この会話観は日本語学習者に対するボランティア活動をしようとする者に多くみられるものである。中でも日本語教育の訓練を経たボランティアには、自己の役割を会話の練習相手と位置づけることが多いのではないだろうか。この場合、実習の目的は語彙や文法項目のモニターに移るため、たとえ会話がスムーズに運んでも話題の内容が動的情報として共有されにくい。

しかし、ボランティアのこうした「日本語練習台」観がかなり一般的であ

る以上、センター側は実習の目的をよほど強調して説明するとともに、活動の内容や方法自体を目的が体感できるものとする必要があるだろう。

この他に、日本語教育への関心と実習が噛み合わない例としては、実習を通して日本語の教授法の面で得るものがなかったというような場合がある。これはセンター学習者と一般の日本語学校に在籍する学習者との年齢や学習適性、学習ニーズ等の違いが理解されていない場合に起こりがちである。

・ボランティア観

参加者のボランティア観が実習の目的と合致しない場合も多い。ボランティアが自己の役割を「教師」とであると位置づけている場合や、「何かしてあげなければ」という奉仕型のボランティア観から参加した場合、学習者との関係は上下になり、対等ではなくなってしまう。

ボランティア観については、センターから参加者に対して、「参加者側も何か発見や『気づき』を得て帰ってほしい、中国のことも学習者から知識を得てほしい」と事前に告げてきたし、実習後の質問紙においてもその実現の有無を尋ねている。しかし、参加者側に動的情報を得たという実感があって初めてこれらの働きかけは有効となるものだろう。

・対人接触への消極性

自らセンターに飛び込んでくる積極性を持ったボランティアとしてではなく、団体参加の場合、学習者との接触に対して消極的な参加者が含まれることがあり得る。

c. 継続参加に伴うマンネリ化

初回参加時には発話以外の手段でもこんなに意思の疎通ができるのかということに驚きと喜びを感じた参加者でも、何回かそうした場面を体験するうち、4ヶ月ではあるいは年を取ってから始めたのではやはりこの程度か、と限界を感じるようになる場合が多い。また、センターの実習は4ヶ月周期で繰り返されるため、長期に亙る継続参加者は同種の実習活動に何度も参加することになりかねない。そのような場合、参加者も初めの頃の物珍しさや充実感、すなわち動的情報の質と量が低下してきて、いわゆるマンネリ化現象が生じるということになる。しかし、ボランティアの自主性から実現した異

文化接触の機会が、1期や2期の参加で以後の参加が意味のないものになってしまうのは残念なことである。

現時点での対処としては、一人のボランティアに同じタイプの活動および同じタイプの学習者ばかりとの実習への参加を避けるようにしている（ただし、青年の場合は互いに親しくなることの意義を重視し、1期通して1つのクラスの学習者と付き合ってもらうように組んでいる）。しかし、同じタイプの学習者／活動に誘わないようにしていくと、カリキュラム上活動タイプがある程度固定されているため、複数回参加したボランティアは自ずと次に参加できる活動のタイプが限られてきてしまう。従って、今後この制度を持続させるためにも、継続参加者に対する実習プログラムの見直し、開発の工夫が必要となろう。（本紀要「センター支援団体と学習者との交流活動プログラムの活性化のための実践報告」参照。）

d. 負のフィードバックの供給断絶

卒業や転居などの不可避の理由以外で参加者の再参加の希望評定が低下した場合、それは、動的情報があまり得られなかったという、実習に対する否定的態度を意味しているとみなし、以降の参加要請を止めているが、これではその参加者から以降のプログラムへのフィードバックが得られなくなり、プログラムが自己完結してしまうという問題がある。しかし、センターにとって実習はやはり学習者中心のプログラムである。従って再参加の評定が低下した参加者が以降の実習に参加しなくなることも学習者側の目的がある程度達成されていればやむを得ないこととしてきた。今回、初めてこうした事例を取り上げる（ 、 参照）

3) 外とセンターとの関わり

a. 研修中という環境の限界と学習者参加者双方のプライバシー

2世クラスの場合、研修期間中に、同じ青年ボランティアと友達感覚の交流ができればと意識的に継続参加を依頼している。従って、複数回に亙る交流活動参加により特定の学習者と親しくなることもある。しかし、研修期間中は学習者に対するセンターの管理上の責任もあり、原則としてセンターで

の実習を通してのつきあいに限定せざるを得ない。このことが交流の意欲を阻害する場合もあるだろうが、これは研修中という環境の限界である。しかし、センター修了後も、彼／彼女とその学習者との友人関係が続いていくようならば、それは日本社会にこれから入っていく学習者にとっては得難いサポートとなるだろう。

また、センター全体に対する興味から参加してくる全てのボランティアが学習者と友人関係を求めているわけではなく、学習者にとっても同じことが言えるだろう。従って、どちらかからの一方的な思い込みや習慣の違いによるプライバシーの侵害が相互にないように、呼びかけ側はそれぞれの個人的な情報に関する扱いには配慮するようにしている。

b.場の限定性

センターでは実際に学習者と接することで帰国者、中国人イメージの個別化を期待しているが、センターという環境下（学習者が実質上、まだ生活を始めていない）で、しかも研修時間内での学習者との接触の場しか提供できない実習プログラムからでは、得られるイメージもまた、一面的な、偏ったものにならざるを得ない。

これに対しては、修了生の生活状況や帰国者問題に関心を持った参加者があれば、センター資料室を開放して関連の資料を閲覧してもらっており、体験的なイメージ形成に間接的に役立ててもらえることを期待している。

c.参加者からプログラムを超えたセンター全体へのフィードバック

現時点では参加者からのフィードバックはプログラムに組み込まれており、プログラムを超えたセンター全体へのフィードバック機構は恒常的には働いていない。（のBのケース参照）

d.外部とのネットワーキング

実習参加者に限らず、地域社会にセンター/帰国者問題の存在をアピールしていくことは今後必要となる分野である。

このプログラムが外の世界とつながっていることに根ざすこれらの問題は、この一年の参加者の増加と多様化によって顕在化してきた。今後この方面への対応はセンターにとってますます重要となるものと考えられる。ただ、これらの課題についてはセンター内の事務処理能力のキャパシティの問題もあり、その限界を見極めた上でどの広さ、どの深さまで外部と繋がりを持っていくのかを今後慎重に検討する必要があるだろう。

今、あえて参加者が獲得するものの重要性を説くのは、これまで参加者への働きかけを学習者側の目標達成に関わる面に限定していたことに対する反省に基づく。また、参加者への期待についても、センター側が口で言うだけで参加者が体得してくれるというのは楽観的に過ぎるだろう。事実、これまでに参加したボランティアが全て上述のように動的情報を得ていたとは言えず、センターにはすでに参加者からの否定的な評価の蓄積も少なくない。

4.本研究の目的

今やセンターにとって日本人参加者の存在は、学習者の日本社会との接触の第一歩として不可欠のものとなっている。と同時に、センターから日本社会、特に地域への働きかけの場としても実習を捉えたいと考えている。これまでの実習参加者はセンターに自ら飛び込んで来たボランティアがほとんどだった。ということは、動機は何であれ、彼らには学習者との接触への積極的な意志があったということである。しかし、今後センターが地域に向けて今一步踏み出していこうとするのであれば、興味はあっても学習者との接触にそれほど積極的でない参加者も対象となる。また、実習に否定的評価を与え、参加に消極的になった者の声も肯定的評価と等しく重要な資料となる。

それらの人を受け入れていった実習の場では、学習者と参加者そしてセンターとの間でどのような相互作用が行なわれる可能性があるのだろうか。そして、センターはそれに向けてどのように動いていくべきなのか。その方針

を立てるためにまず基礎資料を集めて課題を抽出する必要がある。

そこで、本研究の目的を、

実習への継続参加状況を参加者のデモグラフィック属性や参加動機等の傾向、彼/彼女らが実習から得ている動的情報の内容の記述を行うとともに、上記の問題点の事例上の現れ方を確認し、今後の参加システムおよびプログラムの改善に供する

とした。以上のように、本研究は日本人参加者と学習者との交流活動プログラムの活性化のための実践的研究の第一歩と位置づけられる。

・実習参加システムと継続参加の状況

本章では、継続参加状況の全体的傾向を見ていく。

なお、ボランティアの参加経緯は、その参加に対するボランティア（自発）性の観点から、おおむね以下の5つに分類される。

- a．センター支援を目的に結成されたボランティア団体にセンターが参加を依頼したもの
 - b．大学のゼミや高校のクラス/クラブ活動の一環として、あるいは公民館活動やPTA等の社会教育研修の一環としてセンターに対して団体として参加希望を出してきたもの（但し、個々の参加者は研修として参加しており、ボランティアという意識で参加しているとは限らない）
 - c．卒論やレポートの取材、ボランティア活動等を目的としてコンタクトをとってきた個人を実習参加の形で受け入れたもの（センター講師の伝手を頼ってきたものを含む）
 - d．センター講師の個人的な関係者にセンターから参加を依頼したもの
 - e．地域社会への働きかけとしてセンターが行なった参加呼びかけに応じて参加したもの
- eはまた緒についたばかりで、現時点ではa～dが主である。

1．現在のボランティア参加システム（資料1）

2．継続参加の状況

本節では、継続参加者のデモグラフィック属性や動的情報の評価、動機等についての全体的傾向をみることにする。

1)調査対象：当センター第39～41期間(93.2～94.1)で2回以上参加のボランティアのうち参加経緯のb～eに当たる参加者。なお、比較のために適宜第39期～41期の各期参加者の全体平均を示す。6)

また、実習の質をできるだけ統制するために、担任教授者のプログラム評価が低い実習(4段階評価の2以下)は対象としなかった。

2)手続き：参加動機については、毎回次の8項目から優先順位の第3位まで回答を求めた：帰国者に対する教育、日本語教育全般、以外で広く帰国者問題や当センターへの関心、異文化間交流、異文化間教育、ボランティア活動、中国の文化、言語、歴史(現代史を含む)、研修や授業の一環、その他。

実習の評価については、4段階の間隔尺度による評定法を用いた質問紙調査を実習後に実施した(資料2:41期現在のもの)。そのうち今回は39期から実施していた以下の3項目を「動的情報」獲得の目安として取り上げる。

- ・実習に参加してみても楽しめましたか
- ・あなた自身にとって実習は意義がありましたか
- ・コミュニケーションがとれたという実感は予想と比べてどうでしたか

3)調査結果

A. デモグラフィック属性：性別、年齢、社会的身分と参加経緯

下の[表A- ~]より、代表的な継続参加者は20代女性の大学生が多く、参加経緯としては、b授業研修の一環か、c個人でセンターに参加希望して来たケースが多い。これは、団体参加者の絶対数が多いことと、センターの2世学習者のクラスでは、交流相手として、大学生のボランティアをなるべく継続参加してくれるように、教師が積極的に働きかけている理由にもよると思われる。それに次ぐのは30代～60代の所沢周辺地域の主婦層である。参加経緯は、地域の社会教育研修の一環として参加したケースやセンターから地域社会への呼び掛けに応えたもの等である。地域社会への呼びかけは第41期から始められたもので、今後も継続して行なっていくので、地域社会からの主婦層の参加は今後増えていくものと思われる。有職者の男性ボ

ランティアは少ないが、実習が平日の昼間に行なわれるため、その確保は難しい。

性別	人数
男性	1
女性	31
計	32

年代	39～41 継続参加者	41期 参加者全体
10代	0	14
20代	16	87
30代	6	31
40代	5	48
50代	4	68
60代	1	18
計	32	266

身分	人数
大学生	12
主婦	10
有職者	5
研修生	2
他	3
計	32

異文化間教育の専門研修機関の研修生

[表A-] 参加経緯と社会的身分

参加経緯	合計	大学生	主婦	有職	研修	他
b. 団体参加をきっかけとするもの	14	7	5	0	2	0
c. 個人で参加希望したもの	13	4	4	3	0	2
d. センター講師から依頼したもの	0	0	0	0	0	0
e. 参加呼びかけチラシに応えたもの	5	1	1	2	0	1
計	32	12	10	5	2	3

[表A-]の参加回数毎における「参加動機の第1位」を見てみると、1回目、2回目ともに第1位は「日本語教育全般」であり、第2位が「異文化間教育・異文化交流」「ボランティア活動自体」となっている。「日本語教育全般」「異文化教育・異文化交流」が多い点については、Dの「参加経緯と参加動機」の関係の項で取り上げる。

センターが中国帰国者の教育機関として存在する割には、「帰国者教育」「帰国者問題全般や当センター」、「中国文化・言語・歴史」が動機である者は少ない。「中国文化・言語・歴史」動機が少ないのは、もともと中国に関心のある者は中国語が出来る可能性が高く、実習の性質上中国語の出来ない人に呼び掛けることが多いためである。

2回目参加者は、1回目参加者とほぼ同じ人物であるが、参加動機には1

回目と2回目では変化が見られる。そこで、参加者個人の「参加動機」の変化を見てみると、参加動機の第1～3位のいずれかに変化のあったもの（参加動機が新しく加わったものも含む）は32名中23名（約72%）、その中で動機第1位に変化のあったものは17名（約53%）であった。つまり、半数は初回の参加動機とは違った目的で2回目、3回目の実習に参加している。

[表A-] 参加動機

参加回	1回目				2回目				3回目			
	1位	2位	3位	計	1位	2位	3位	計	1位	2位	3位	計
1.帰国者教育(12)	0	3	2	5	1	2	2	5	1	0	1	2
2.日本語教育(36)	10	2	1	13	11	5	1	17	2	3	1	6
3.帰国者(15)	1	2	2	5	2	3	3	8	1	0	1	2
4.異文化(45)	8	5	4	17	10	6	5	21	4	1	2	7
5.ボラ(40)	8	7	2	17	10	4	2	16	3	4	0	7
6.中国(16)	2	2	3	7	2	2	3	7	0	0	2	2
7.研修・授業(4)	1	0	0	1	1	0	1	2	1	0	0	1
8.その他(4)	1	1	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0
計(172)	31	22	18	69	37	22	17	76	12	8	7	27

B. 参加回数と参加頻度

継続参加者32名の中で4回以上の参加は1件のみである。参加回数の頻度から見ると、1期に2回続けて参加しているのは16名、また、3回の継続参加は6名であった。1期の内の参加回数は多くても3回程度である。これは、1クラスの1期の平均実習回数は大体4～5回、2世のクラスでも5～6回であるが、この中に含まれる定期的な団体参加時には個人ボランティアは呼ばないことと本人の都合等で一期内に3回以上の継続参加は難しいこと、ボランティアの再参加の意志評定値が3以上であっても1期集中して来た後は、呼びかけ担当者も活動へのマンネリ化を懸念して呼び掛けを遠慮しがちになることによる。

[表B] 参加回数と参加頻度

回数	計	参加期と人数			
2回	18	40期..5人	41期..5人	39期と41期..1人	40期と41期..8人
3回	13	39期..1人	40期..2人	41期..3人	39期と40期..1人 40期と41期..4人 39期と41期..1人
4回	1	40期と41期..1人			

C. 継続参加者・期別参加者に見る動的情報評定

[表C-] 動的情報（4段階評価）

	39～41期	39期全体	40期全体	41期全体
参加して楽しめた	3.79	3.57	3.66	3.79
意義があった	3.67	3.48	3.60	3.75
コミュニケーションがとれた	3.22	3.08	3.07	3.31

動的情報に関しては、「楽しさ」が高く、「コミュニケーションがとれた」という満足感が低いという傾向はどの期にも共通する傾向であり、継続参加者に関するも同様である。動的情報の評定の数字については、期を追うごとに高くなっているが、実習活動プログラムに大きな変更はないので、これは期による参加者の違いによるものだろう。しかし、今回の調査対象である継続参加者は第39～40期の参加者がほとんどであることを見ると、継続参加者は全体平均より動的情報の評定が比較的高いと言える。

D. 各項目間の関係：参加経緯と参加動機、社会的身分と参加動機

[表D-] 参加経緯と参加動機

	母国語	日本語	英語	異文化	ポリア	中国	研修	他	計
b 団体	1	1	0	1	0	6	0	2	30
c 個人	0	1	3	5	1	4	0	1	24
e フリ	0	4	0	3	3	0	0	0	9
計	1	6	3	8	9	4	2	1	63

上記の表は、継続参加者の参加2回目までの参加経緯別動機第1位の分布である。特徴としていえるのは、「団体参加がきっかけの参加」者に、日本語

教育全般に興味を持つ者と異文化間教育・交流に興味を持つ者が多いということである。これは、日本語教育や異文化間教育を専門とする機関（大学、専門教育機関）から、定期的に参加希望があることに起因する。3番目に多いのは、ボランティア活動自体に興味のある者であるが、これは、地域活動を行うグループの参加があるためである。次に、「個人による参加依頼」で、最も高い動機はボランティア活動である。これは、メディアや人を通してセンターの存在を知り、ボランティア活動自体を希望してきたケースや日本語教育関係者が本活動（ボランティア参加型学習活動）に興味を持ち参加したというケースも含まれている。

[表D -] 社会的身分と参加動機

	帰国者層	日本語層	帰国者層	異文化	ボランティア	中国	研修	他	計
大学生	0	6	0	3	1	1	0	1	12
主婦	0	1	1	1	6	0	1	0	10
有職	0	2	0	2	0	1	0	0	5
研修生	0	0	0	2	0	0	0	0	2
その他	0	1	0	1	1	0	0	0	3
計	0	10	1	9	8	2	1	1	32

社会的身分別に参加動機をみると、日本語教育を参加動機とする大学生とボランティア活動を動機とする主婦層が目立つ。学生に日本語教育動機が多いのは、センターが日本語教育の現場研修の場として位置づけられているためであると思われる。主婦層にとってはセンターは中国帰国者の研修施設という位置づけで、実習参加は帰国者に対するボランティア活動の性質を持っているのだと思われる。また、昨今の地域社会でのボランティアに対する関心の高まりもあるのではないか。

異文化間教育・交流に対する興味は、社会的身分との関係は薄く、いろいろな立場の人が持ち得る動機のようなようだ。

継続参加者の得ている動的情報（事例を中心に）

1. 方法

1) 調査対象

A：第39期～41期の間に4回目以上の参加実習のあった継続参加者（うち、もともと帰国者支援のボランティア活動に関わっていた者および参加回の全てが研修や大学の単位のための者を除く）7）

上の条件を満たす7名中、6名とアクセスできた。できるだけ多様な背景をもつ参加者を取り上げたかったが、 できたように継続参加者自体にある程度の偏りは避けられず、全員が女性となった。社会的身分では2名が主婦、3名が大学生、2名が会社勤務となり、世代でみると20代前半が3名、20代後半が2名、40代前半が1名、50代が1名である。今回取り上げるのは紙幅の関係から、このうちの4名である。

対象者は、調査者とは毎回の実習参加を通して顔見知りであり、ある程度のラポールは築けているものと判断される。

B：Aと同じくもともと帰国者支援ボランティア活動等に関わっていた者および参加回の全てが研修や大学の単位のための者を除いた、第39～41期中の2回以上参加者のうち、再参加の意志の評定が転居・卒業などの不可抗力以外と考えられる理由で4段階の2以下に低下したボランティアの中から、今後の地域への呼びかけを計画する上で最重要な対象と考えられる地域団体の社会教育の一環として初回参加した1名に対してインタビューを行なった。

2) 手続き：電話による半構成的インタビューを行なった。対面調査の方が望ましいが、予算と時間の制約のため、電話インタビューとしたものである。

事例研究の形をとったのは、継続参加者の数自体がそれほど多くないこと、それ以上に背景も動機も多様な参加者一人一人の生の声を取り上げることに意義があるとの判断に基づく。所要時間は20～40分で、調査者2名が分担してインタビューを行なった。

3) 項目

a. 参加動機および帰国者、中国・中国人、当センターの各々に対するイメ

ージのセンターに来る前および来るようになってからの変化を尋ねること
で実習で得た動的情報の内容にも言及してもらう

b. 今後のセンター実習への参加の意志

c. 言葉の通じにくい人とのコミュニケーションや交際の可能性と限界について
の見解

d. (必要があれば、質問紙上の個々の自由記述回答のフォローアップ)

c. はセンター学習者に限らず、今後の地域社会の中での外国人との接触の
可能性についての見解を聞くために加えた項目である。

4) インタビュー結果の処理

文字化された資料から継続参加者の得ている動的情報の各領域におけるカ
テゴリ化を参加経緯、動機の変化、その他考えられるデモグラフィック要
因との関連で試みた。併せてプログラム上の問題点を抽出しようとした。

なお、 で取り上げた継続参加者の自由回答も適宜考察の対象に加えた。

2. ケース記述 (資料4 参照)

3. 得られた動的情報についての考察

今回この4つのケースを取り上げた事由を先に記しておく。()内は参加
経緯 (参加経緯の種類については本稿 参照)

A: 主婦業の傍ら日本語教師養成講座を受講し、日本語教育のボランティア
を志望してきたというセンター実習への参加動機の中で最多数を占める層に
属する中で、一貫してコミュニケーションへの欲求を持ち、ボランティア観
の大きな変化を見せてくれたケースとして (c)

B: 実習参加期間が長いため多様な学習者と接したこと、また関心の広がり
からセンター外にも日本語教育現場との接触を求めたこと等によりセンター
へのフィードバックの多いケースとして (c)

C: 研修参加からの発展 (= ボランティア活動をしようという動機からでは
なく) で、同世代として青年学習者と継続的に関わり、修了後も友人関係を
続けていくようになった自然体の青年ボランティアのケースとして (b)

D: 個人で積極的に飛び込んでくるボランティアと異なり、団体参加で初め
て生まれたセンターとの関わりであり、今後センターが地域社会に向けて参

加を呼びかけていきたい「関心はあるが一人で飛び込むほど積極的にはなれない」層の参加者として、またその中で再参加の希望評定が2に下がってプログラム上の問題を提起してくれたケースとして (b)

世代で見ると、AとDが子育ての一段落した40代前半、大学生であるCと共に、ボランティア参加の機会が多い世代である。Bは20代後半、勤務の合間を縫っての参加である。

以下の記述ではケースの発話を””で括って引用した。

1) 動的情報の内容と変化

本節では -2. で述べた4領域の順に考察を加える。

a. 日本語を第二言語とする相手とのコミュニケーション力

・「慣れ」

最も顕著な変化は学習者とのコミュニケーションの成立、すなわち「場」の共有が回を重ねるごとによりスムーズになってきていると認知されてきていることである。初めてのときの緊張も回を重ねるにつれ、”肩の力が抜け”(A)、“日本語に不慣れな人との交流にもかなり慣れてきて溶け込みやすく”(C)、すなわち場を共有することがより容易になってきているという。特に青年であるCの場合、同じ学習者と続けて会うことで”友達感覚で気軽におしゃべりできる”ほど打ち解けている。

「慣れ」はごく当たり前のことのようにであるが、我々の予想以上に大きな力となっているのではないかと考えられる。慣れるということは参加者にとって、それまでの成功体験がスキルとして学習されたということである。これは参加者にとって実習が体験学習の場として有効に働いていることを表しているだろう。実習という限られた特殊な場面であれば、場数を踏むだけで言語・文化を異にする相手とのコミュニケーションスキルは学習される。これはもともと場数を踏むだけで学習される程度のスキルであるとも言える。

・筆談が可能であるということがもたらす積極性：

Aは初めの頃は日本語を理解してもらおうと、日本語教育の訓練を積んだ者としての配慮からいわゆるティーチャーズトークもしくはフォーリナートークに近い話し方をあえて採っていたのが、4回目の参加で”学習者のかた

はそんなに早く日本語が話せるようになる訳ではないから、筆談で会話ができるならそれでいいと思う” ようになっている。筆談は漢字圏の者同士にのみ可能なコミュニケーションの手段であるが、筆談に頼ってでは発話の機会がなくなると考えれば、これは日本語教育の立場から見れば一種の後退ともとれる。しかし、このときの実習でAは”結局筆談に頼ることになったが、得るものが多かったと初めて感じ”、学習者に発話させることに拘らないという態度の変化をみせている。もちろん、筆談では伝え得るにしても単語レベルであり、伝わらずに残る部分が多い。それに対して参加者はあせりやもどかしさをやはり感じている。しかし同時に、”自分の知らないことを教えてもらえる喜びがある”(B)とも感じているのである。これはやはり、手段がどうであれコミュニケーションによって動的情報を得られることの方が重要であるというコミュニケーション観に起因するだろう。

このような筆談に頼りがちなコミュニケーション場面は研修期間の短い当センター特有の事情かもしれないが、日本語がほとんど未習の段階でも漢字圏の識字者間でならコミュニケーションがある程度可能だと知ることは双方のコミュニケーションに対する積極性を増す効果があると考えられる。

・共通のものを見つけようとする欲求

前出のAが筆談を通して得たものこそが動的情報であろう。このケースは学習者と参加者との間のコミュニケーションのあり方を考える上で重要な示唆を含んでいる。以下にAのケースを見ていきたい。

4回目の参加で彼女は”偶然、中国で国語の教師をしていた孤児配偶者と2：1で話すことになり、自身も以前に国語の教師をしていたため、相手学習者に対する興味が自然に湧き起こってき、この人は中国ではどうしていたのかという興味から中国のことを知りたいと思うようになった”。そして”漠然と趣味や出身地について聞くよりも共通の話題について話せた方がずっといい。4回目で何をどうすればいいのかがやっと見えてきた。共通のものが見つけられればコミュニケーションはできる”という。

上の発言にみるように、偶然、共通の興味や関心を持った学習者と出会ったことによって、Aの内面において学習者との会話観にかなり劇的な変化が起こっている。共通のものへの興味からその学習者が背景として持つ中国へ

の関心が生まれ、センターの成人学習者も半数は配偶者つまり中国人であったことに思いを致すことになる。

興味や関心を共有する話題についてのコミュニケーションギャップが生じて初めてコミュニケーションへの欲求が生まれ、そこで共通のものを見つけようとする過程が即ちコミュニケーションとなることを彼女は体験を通して語ってくれているように思える。4回目で大きな変化があったとはいえ、Aが一貫してコミュニケーションを志向していることは、2回目の参加時の”こちらの聞きたいことに相手が答えてくれると、少しその人のことがわかったような感じがする”という発言からも窺える。

青年のCになると、'日本の同世代の子のようにおしゃれだったり歌の好みも似ていたり共通のものが多く、親しみが持て、”互いに話したい聞きたいことがたくさんある”という。青年は共通のものを持つ確率も上の世代に比べて高いことが予想できる。国や政治体制の違いを越えて現代の青年にある程度普遍的な「青年文化」の存在がこれに与っていると考えられる。

a.のまとめ：以上にみてきたように、学習者とのコミュニケーション力は、コミュニケーションによって共通のものを見つけようとする欲求があれば、回を重ねることで体験的に学習される部分が大きいものと考えられる。

b. 帰国者、中国・中国人のイメージ

帰国者のイメージの変化ないし生成はどの参加者にもおこっている。

・帰国者イメージ中のパーソナリティ面に関して：

参加者の多くにとって帰国者は、やはり苦勞してやっと祖国に帰って来たが、日本に不慣れで大変そうである、したがって”暗い、地味”な存在である。こうしたイメージから「助けてあげる」べき対象と認知されやすいと推測される。このイメージが実際に学習者と接触した後では、どの参加者も”明るく親しみやすい”といった印象へと変わっている。特にCは青年同士であったためだろう、学習者と”友だち感覚”を共有し得るようになり、”日本人と比べて気持ちのよい、つきあいやすい人たちだ”と思うようになる。コミュニケーションへの積極性等の学習者に対する肯定的態度はここで取り上げたケースに限らず、実習参加者に共通のものである。しかし、帰国者に限

らず在日中国人の対日本人の印象がおしなべて「冷たい、人情に薄い」であることを思えば、学習者たちの参加者への歓迎ぶりは、裏を返せば同じ形で歓迎を彼らに与えない日本人との誤解や摩擦を予想させる。参加者は学習者のこうしたいわゆる人情の篤さを中国の文化と認知しているだろうか。これについてはCが”彼らが帰国者だから却って日本人との交際に積極的ということなのだろうか？”と判断を保留しつつ述べている。

・アイデンティティに関して：

そこで、文化的アイデンティティの面から参加者の対学習者イメージをみると、実習に参加する前は、メディアから得た情報により帰国者＝日本人と認知している参加者が多い。これには帰国者と呼ばれる人たちが全員、戦後中国にとり残された日本人であるとの誤解に基づくものも含まれるだろう。ここには、中国人である帰国孤児の配偶者および二世の存在が抜け落ちている。また、対中国人イメージはCの帰国者と同一視されたもの以外には4人とも殆ど持っていなかった。

実際に接触することによって、参加者は帰国者の中国文化を持った者としての面を認知していく。ここでも、対面した一人の学習者への関心からそれ以前はあまりなかった中国への関心が湧いたというAのケースが興味深い。その彼女も、2回目の実習では”外見が似ているだけに生活習慣の違いに思い及ばない点がある”ことに言及するほど、学習者の外見と内面(中国文化)との日本人側から見た乖離が気になっていた。4回目ですべて彼ら配偶者が中国人として暮らしてきたことを認めていなかったことに気づいている。

Dも実習参加によって中国語や中国に関する物事に初めて触れ、中国のことを何も知らない自分に気づいている。その意識化がその後の中国語講座の受講への動機づけとなった。

学習者の中国文化を持った者としての側面は、それを前面に打ち出した活動ではより鮮明に参加者に伝わっている。餃子教室に参加したAは学習者が自国の料理を含めた文化全般に誇りを持っている姿に接し、”毅然とした”ものを感じている。またBは座談会や実体験等を通して「割り勘」を嫌う中国文化の大陸的な考え方に触れたという。

Cは帰国者に対しても中国人に対しても等しく”暗い”というイメージを

持っていたためか、親近感を抱く方向への態度変容が帰国者に対して起こったのと同時に中国に対しても起こっている。3回目の参加時には” 帰国者に対する関心も高まり、偏見（暗い等）もすっかり消えた ” と述べている。そして、一緒に喫茶店へ行くという日本の青年にとってごく当たり前の交際活動を通して、自分の接している学習者も自分と友だちになれる同じ若者なんだと感じた。これらの活動を通じ、学習者を中国人あるいは日本人のどちらかと思って接すればいいのかと迷いつつも ” 結局自分と同じ人間なんだ ” と考えているという。

この帰国者像の違いには20代前半と30～40代という世代の差が関与しているように思われる。どちらも個別の学習者への共感に発しているが、40～50年を中国で過ごしてきた事実を尊重することは同じ人間としてという言い方よりもやはり中国の人としてという言いの方が似つかわしいとAは感じたのではないだろうか。

Bの場合は参加期間が長く、接した学習者も多いことから帰国者イメージは二転三転している。初めは多くの参加者と同様、日本人だと思っていた帰国者が、実習に参加するうちに中国的な価値観を持っていることを知る。しかし、最近になって接した学習者がたまたま日本で生活していた幼少時代の記憶および日本語を保持している者であったため、”この人たちは日本人なんだと改めて気づかされた ” という。そしてこの学習者から戦中戦後の苦労話を聞いたことが、戦争の生き証人という新たな側面を持った帰国者のイメージ形成に与っている。

実はこのように帰国者といっても決して十把一からげにはできない多様な背景を持っている。孤児本人 / 配偶者 / 二世の別は措いても、生活背景の違いの大きさや少数であるが日本語 / 日本文化の保持者や少数民族の文化保持者もいることなどは、参加者に知ってほしいことである。

・生活者としての面：

また、Bはこのときの活動がスーパーでの買い物場面のビデオ撮影の補助という役割だったことから、帰国者が特別な人ではなく隣近所になるかもしれない人なんだと感じられるようになったとも述べている。これはCが自身自身にとって日常的な行動を学習者と共にすることを通して得た学習者に対

する親近感と同質のものだろう。

また、逆にAは、学習者が中国でのそれなりの仕事や暮らしを捨ててまで帰ってきていることを知り、そうした気持ちは自分には推し量れないと述べているが、これも同じ生活者として我が身に置き換えて考えたことによるものだろう。しかし、“文革(筆者注：=文化大革命、当時日本人だという理由で迫害を受けた孤児は少なくない)とかいろいろこちらにはわからない事情があるのだと思うようになった”と、共感を寄せている。これは職業と家庭を持って生活してきたA以降の世代ならではの孤児世代に対する共感であろう。

このように、自分自身と共通のもの - 同じ生活者、同じ若者、同じ職業人 - を帰国者が持っていることの発見は一面的でないイメージ形成に寄与していると考えられる。共通性が見つけれれば、帰国者を対等な人間とみて互いに動的情報を生成していこうとする動機も生まれやすいのではないだろうか。

また、B、Cはすでに日本に定住している帰国者の生活から、日本人とのつきあいのなさや経済的社会的に困難な状況を垣間見ている。帰国者の生活状況についてはマスメディアを通して伝えられており、Cの当初の“暗い”というイメージもそこから得たものである可能性が高い。しかし、実際に接してすでに親近感を持った帰国者の生活として、センターという一種温室のような環境を出た後に彼らを待ち受けている生活の厳しさを捉え直すことはより総合的なイメージ形成に与っていると考えられる。センター在所中の学習者と参加者との接触は実習時間に限られるため、そこで得られるイメージもまた一面的であるが、これは4ヶ月という研修期間の短さからくる限界でもある。その意味でBやCがセンター外に接触を求めようとしたことは重要だろう。8)

b.のまとめ：漠然と日本人だと思っていた帰国者の中に中国文化という異質なものを発見すると同時に、自分自身と共通の面も持った、ごく普通の人であることにも気付いていくという過程が実習参加を通して生じている。

c.異文化との調整・受容

参加者と学習者の双方が相手の文化と衝突したりその受容/拒絶を迫られ

たりするほどの場面は教授者のコントロール下にある実習中にはほとんど起こっていない。この領域はセンターの短い研修期間中に体験的に動的情報を得ることもその評価も容易でない領域である。

ここでは、日本社会側の異文化受容の問題として帰国者に言及しているBのケースを取り上げたい。Bは実習に何回か参加するうち、センターの教育目標が学習者の日本文化への同化であると感じられたため、それに対して”日本式のやり方ができないのではなく文化の違いなのだから、日本式に合わせるといっただけでは日中双方にとって良くないと思う。学習者が自分で考え学べればよいのではないか”と疑問をぶつけている。これには実は、彼女が勤務先でセンターの実習のことを話したときのオーストラリア人同僚の”なぜそこで彼ら帰国者が改めなければならないの?”という批判に触発されるところが大きかったという。

その後、これはセンターがそうであるかどうかという問題ではなく、またそうだとするとセンターだけの問題ではなく日本社会全体の問題であると思うようになったという。この変化をもたらしたものの一つにBは日本人としての幼少時の記憶を保持している学習者との出会いを挙げている。Bは、このタイプの学習者には「日本人なんだから日本人らしく」という自他のプレッシャーがより強いように感じている。そして、以前に見学に行ったインドシナ難民センターと比較して、インドシナ難民に対する教育ではさすがに「日本人から見ておかしくないか」という基準では指導を行っていなかったという印象から、やはり帰国者に対する日本社会のプレッシャーの強さを思ったという。そして、閉鎖的な日本社会だからこそ帰国者の存在が貴重だと述べている。

彼女が異文化受容の視点を持ち得た契機は、センターで得た動的情報ではなく、文化多元主義を国是としているオーストラリア人同僚の声であった。また、帰国者の立場を相対化して見る視点は、日本で生活している帰国者を対象とする日本語教室やインドシナ難民という別の在日外国人に対する教育現場へ彼女が自身の関心から赴いて行って得たものである。

また、Aのように、初めは彼らの50年に互る中国人としての生活背景を認めていなかったことに気づいたという場合でも、帰国者が日本人とイコー

ルではないと気づいていなかったまでであって、中国文化を持った人であると知りつつそれを認めないというわけではない。つまり、異文化への受容性自体は彼女自身がもともと持っていたものである。

このように、学習者の中国文化への誇りに触れ、その異文化的側面を尊重すべきだと考えるようになる参加者は多いが、そうした受容性は実はもともと参加者自身が持っていたもの、あるいはセンター以外の場で培われたものであった。これは実習参加希望者に、もともと異文化への関心が高い者が多いことと関連があるだろう。

しかし、帰国者＝日本人と捉え、日本人らしくできるように教育することがセンターの、そしてボランティアの任務であると考える参加者も少なくはない。そしてこれが依然として日本社会全体の傾向でもあるため、個人のそのような態度の変容は容易ではない。

青年参加者は、Cのケースのようにセンターでの出会いがきっかけとなって修了後の友人関係に繋がっていく場合があるため、その交際の中で異文化をどう受容していくかを迫られる場面に遭遇する可能性がある。

d. ボランティア観

ボランティアをしようという動機から実習に参加した者とそうでない者とはボランティア観自体の上で得た動的情報の内実は異なると思われる。そこで、ここでは前者でボランティア観の変化が大きかったAのケースから取り上げることとする。

・「あげる」から「共にもらう」へ：

Aは初めは日本語会話の練習台と自身を位置づけており、その結果本当に役に立っているのか掴めず物足りなさを感じていた。しかし、センター側からもボランティアとしてどのように手助けすべきなのかについて説明がなされず戸惑っていたという。ところが、4回目の参加でボランティア観の上で大きな変化が起こる。それまでは「自分がこの人たちのために何かやらなければならない」と思っていたのが、自分の方から中国のことを知りたい、聞かせてほしいという、自分が何かを得ようと思う方向への変化が生じている。

これはボランティアが一方向的に与える存在ではなく、与えられる存在でも

あることが体得された例であろう。ここで相互に与えられるものが動的情報であり、その過程がコミュニケーションである。養成講座出身ボランティアが”互いに練習台と考えている”場合、学習者との会話においてこのような相互作用は起こりにくい。しかも根本的な態度に関わることであるだけに、その変容は自動的ににはなされにくいだろう。Aも”それまでもセンターからは、中国のことも聞いてみるよにとの事前説明があったが、その意図もわからなかったし、実習後の質問紙に『何か発見や気づきがあったか』という項目があるのを見ても、自分が得るものを期待して行ったのではなかったため、どうしてこういう項目があるのかと訝しんでいたほど”であったという。・友だちになれる：

Aの場合と逆に、Cは授業の一環として参加したことがセンターおよび帰国者との関わりのきっかけだったため、彼らの助けになりたいなどは最初のうちは考えていなかった。しかし、何回か参加して学習者に会ったり、また修了して退所した学習者一家を訪問して彼らの日本人とつきあいがいがない様子等を見たりするうちに自分で何か役に立てるのなら助けになりたいと思うようになる。学習者にとって最初の日本人の知り合いが彼らのことを理解しようとする人間であることができれば、少しでも彼らの心の支えになれるのでは”と考えているという。そして、そのように”自分のことだけでなく『人のことも考えられる自分』を学ぶことができる”ことにも意義を見いだしている。これは助けることが一方的な行為ではなく自分にとっても得るものがあるという双方向的な認識である。もともとボランティア意識で関わってきたのではなかった彼女にとって、ボランティアとしての自己像はかえって新鮮であるようだ。

しかし、何よりもまずCの場合は学習者と友人になれることに喜びを見出していることが重要だろう。それまで外国人の友人のいなかったCにとっては自分と異なった境遇の人と出会えること自体が有意義であるという。Cのこの変化は同じ世代の学習者への共感に根ざしている。日本人の青年と同じような行動を共にすることで、学習者が”同じ若者なんだ、普通に付き合える相手なんだとわかって距離が縮まり、彼らとの関係を自分の友人関係の一部にしたいと思うように”なった。おそらく、それまでも学習者を自分と同

じ青年と認知する過程は徐々に進んでいた(“人間的にはまったく同じだと思う”“日本の同世代の子のようにおしゃれだったり歌の好みも似ていたり”“実習以外でも文通したり家に遊びに来てもらったりしたい”)のだろうが、センター外で日本の青年のように行動することで一挙にその過程が進んだものと考えられる。この実習の後には、学習者のセンター退所後も個人的な友人関係を続けたいと思うようになっている。

Cはもともとボランティア動機から参加したのではなかっただけに、動的情報を生み出す“友だち”関係を自然にボランティア観の中に移行させ得ている。その点で興味深いのは彼女の参加動機の推移である。参加動機を問うことは第39期から開始したため、質問紙回答は3回目以降の資料しかないが、1回目は“特に何を求めてきたというのではなく授業として参加していた”のが3回目で動機の第1位が異文化交流、2位がボランティア活動となり、4回目の外で一緒にお茶を飲む活動後には1位と2位が逆転している。

Cのボランティア観には、互いに時間に余裕のあるモラトリアム期間ともいえる社会的身分にあったことや、学習者がたまたま実際に家を行き来することができる距離のところ定住したこと、つまり学生時代の友人関係そのままの交際が可能であったことが与っているだろう。

・学びの場として：

これに対して、Bは実習に参加したことから帰国者問題にも興味を持ち、2～3回目の参加のころ、帰国者支援のボランティア団体主催による日本語教室へ見学に行くが、そこで問題の深刻さを知らされ、自分に何ができるのか、実習に参加するだけでは表面的な楽しい“おいしい”ところだけを経験していることになるのではないかと悩んでいる。彼女にとっては学習者とともに楽しむだけでは学習者にとって十分なサポートとは言えなかった。これには彼女が代的には学習者に近いとはいえ数歳年上であり、かつすでに社会人であったことも関与しているように思われる。社会人では自分の自由になる時間がかかり限られるため頻繁な行き来もままならないし、生活者として帰国者の深刻な生活状況もより強烈に認識されたのだろう。

それではBは実習にどのような意義を見出しているのだろうか。センター内外での様々な体験を経て、5～6回目の「職場事情に関する座談会」参加

後には、”日本社会やその他の社会について考え学ぶことができた。一回一回の実習が学習者にとっても自分にとっても大切なものなのだと思うようになった”と述べている。現在の彼女にとって実習は”自分の知らないことを教えてもらえる喜びがある”場として捉えられている。

・動機の推移 / 広がり :

上に見てきたように、ボランティアは多様な動機で実習に参加しており、またその動機は回を重ねるうちに推移もみせている。これは参加者が動的情報を得ることを期待する領域が推移していったことを表している。動的情報とは他者との関係の中から生まれて来る情報であるから、人との出会いによって興味関心が広がり、また深まっていくこと自体が動的情報であると言うことも可能だろう。

もちろんボランティアは実習参加のみによって動的情報を得ているわけではないので、動機の変化に実習が直接関与しているとは言えないが、何らかのきっかけは提供していると考えられる。そこで、動機の推移が記録に残っているケースに焦点を当てて見てみよう。

Cの参加動機は1回目は授業として参加、3回目で動機1位がおそらく青年学習者への興味から異文化交流、2位がボランティア活動、4回目の後には1位と2位が逆転している。これは前項で述べたように「友人関係＝ボランティア活動」との認識によるものであろう。4回目のときの相手学習者と修了後も友人関係を続けるようになって後の5回目の参加では、孤児世代が相手だったこともあるだろうが、1位が帰国者問題、2位が異文化交流、そして3位にボランティア活動と興味が広がっている。

青年ボランティアの場合、Cのように自然体で興味が広がっていきやすいように思われる。今回は取り上げなかったが、識字教育に関するテーマの卒業論文の資料収集という動機から実習に参加するようになった大学生ボランティアが、帰国者支援のボランティア活動に関わるようになり、卒業後も帰国者問題に関わっていく意志を表明したケースもあった。

Bは初め、日本語教育の現場を見たいという動機から実習に参加するようになった。つまり、この時点ではそれがセンターでなくてもかまわなかった

わけである。しかし、センターで帰国者と接して帰国者問題に興味が生じる。その興味は、オーストラリア人の同僚に触発されたことで異文化適応の概念や日本社会の中での文化的マイノリティに対する教育への関心に広がっていく。中国文化への関心も生まれ、中国語の学習を始めている。さらにその後、戦前の記憶を保持している学習者と出会うことによって歴史への関心も起こり、7回目参加の動機は異文化交流、日本語教育、中国文化・言語・歴史の順となっている。

BとCに共通なのはどちらも直接の接触が何らかのきっかけになっていること、そしてセンターでの実習だけでなく、自己の興味の対象をセンター外にも求めていったことである。

Aの場合は帰国者のために何か手伝いたいというボランティア動機およびセンターの指導方法という日本語教育への関心からの参加であり、3回目には動機の1位が日本語教育、2位が帰国者教育、3位が異文化間交流となっている。4回目では動機は日本語教育一つに絞られている。しかし、ボランティアとしての参加のあり方については自分なりに考えてはいるが迷いもあり、他のボランティアはどうなのか共に考えたいとの要望が出された。また、5年生になる自分の子供にもセンターを見せたいし、センターはもっと外に向けて開かれてほしいとの要望も持っている。これは、青年のCとも社会人のBとも異なる、現在母であり主婦であるという立場からボランティア活動を考えていこうとするAならではの欲求であるように思われる。

・近所付き合いならできたかもしれない：

Dのケースは学習者とのサポートを考える上で重要な問題を提起している。

Dは「面と向かって話す」という活動にかなり心理的な抵抗を覚えている。それは自分が「話し上手」ではないという自己認識のせいもあるだろうが、「外に一緒に出て買い物に行ったりお茶を飲みに行ったりという自然な場なら、もっと楽しくできるのではないか」と述べているように、この活動内容が彼女にとって身近な行動ではなかったことが大きいだろう。

ここで重要なのは彼女にとって人と親しくなる過程でとることができるあるいはとるべき行動が隣人との間で行われるものであることだろう。たまた

ま道で再会した学習者に対しても ” 暇ならうちへ寄って行ってくれるように声を掛け ” ているし、もう一人の学習者に対しても ” 何か心尽くしを、とも思ったがそんな勝手なことをしてもいいものかと思い、何もできずに別れてしまっていて心残り ” だったという。 9)

Dはこのときの実習に対して否定的評価を持ち、以降の参加に消極的になってしまった。しかし、仮に ” 面と向かって話す ” スキルが高くなかったとしても、彼女は隣人との交際的手段もスキルも持っていただろう。つまり彼女の得意分野が実習では生かせなかったのである。隣人としての帰国者あるいは外国人住民という視点は、地域社会において今後主流となるべき視点である。その意味で、Dのようなタイプの参加者が実習によって動的情報を得ることがどのように可能かを探ることは非常に重要である。これについては次章で述べる。

d.のまとめ：以上に考察してきたように、ボランティアは継続参加することを通し、直接センターにおいて得たのではないものも含めて様々な動的情報を得ている。そのことがボランティア観の形成を助けると同時に、新たなボランティア観が動的情報を一層得やすくするという両者の循環的な関係が存在しているようだ。

また、ボランティア観のあり方は、青年のCにとっては友人としての関係を作っていくこと、それより上の世代にとっては自身のボランティア観を確かめていく作業自体がボランティア活動であるというように、世代によっても大きく異なる側面を持っている。

事例にみるプログラムを巡る問題点

本章では、このプログラムを巡る問題点のうち、 の質問紙(回答注)と の事例に現れているもの、また今回顕在化したものを取り上げ、その解決策を探っていくこととする。 10)

1. プログラム自体の問題

1)場の虚構性

この問題に関する参加者の反応は、

- a. "向こう(学習者)が質問を考えてあった"等、仕組まれた「出会いの場」に対する違和感や抵抗
- b. Dの"面と向かって話すのではなく、一緒に買い物に行ったりお茶を飲んだりといった自然な場ならもっと楽しくできるのではないか"と場の不自然さの訴え
- c. "いきなり会ってすぐ話というのは日本人同士でもなかなか難しいことだと思う"といった批判
- d. Aの"何も共通のものが無い二人に会話させておくのは不自然だ、センター側から両者の共通の話題について何らかの示唆がほしい"との要望
- e. 異文化摩擦的な体験の演出である「割り勘」実習において、割り勘にすることを許せずに自分で支払ってしまった学習者がいたが、その学習者の相手だったBからの"日本人でも必ず割り勘にするとはいえないし、特に不自然な感じでもなかったので、授業の中で日本人はよく友だち同士で割り勘にすることが多いから、あなたもこれからそういう機会が多くなると思いますというふうに紹介すればそれでいいのではないか"という批判などが挙げられる。

それぞれについて検討していくと、

- a. この問題については、日本語による、自己紹介的話題を巡ってのやりとりを目的とした活動で、生じやすい問題である。実習準備の教室活動で、話題のネタとして準備している質問項目が、実習の場で自然な流れの中で話題として提出されるのではなく、インタビューや面接のような形式を取ってしまう際に参加者が感じる違和感である。実習の場を一方的でない相互作用の場とするためには、準備段階の教室活動をより実習の場を意識した内容とすべきであろう。
- b, c. この二つは共通の問題を含んでいる。初対面、もしくは初対面に近いもの同士の出会いを、少しでもストレスのない楽なものにするために、演出の問題であろう。これは、交流活動タイプの実施順の問題とも言える。その演出の観点としていくつかのことが考えられる。まず、個人的に出会うことから始めるか、或いは、場を共有することから始めるか、と言う観点。また、学習者にとっては、日本語学習の成果を確認するための場とも

捉えた方が、実習活動参加の意義が高まるのではないかと、しかし、この観点は、参加者にとっては、何の準備のない状態で放り出されることになり、そのことによる不安やストレスは高くなってしまいうだろう等、センターとしても、いろいろな判断の観点のあるところである。しかし、今後交流プログラムを学習者、参加者相互の観点に立った活動内容、実施順で再考する必要があるであろう。

- d.これはAが4回目の参加にして学習者と共通のものを見つけられたのが偶然のことであり、偶然に頼る不安を回避する策の必要を訴えているものだろう。この問題については、参加者が事前に、学習者個人の情報を欲しいと言うことに繋がるが、情報を与えすぎてしまえば、その場の新鮮さが失われてしまうこともあるだろう。従って、教師側が参加者のプロフィールを聞いたところで共通項を見だしやすい情報があれば、またそれを事前に伝えておいた方がよければ、適宜伝えることはできるだろう。しかし、A自身が言うように共通のものを見つけられればコミュニケーションは可能なのである。仲介者の下手な手助けがなくとも、今の彼女のように欲求もスキルもある参加者なら、自分で学習者と共通のものを探っていくてくれるのではないかという期待もセンター側にはある。つまり、実習に参加する際の心構えとして、共通のもの、或いは、自分の興味の持てる分野を相手から引き出すことを目的とすることを強調し、その姿勢を意識化してしてもらうような、センター側の働きかけが必要だということであろう。
- e.この例はセンター側の説明が不十分であったために起こったと考えられる。この実習の目的は、文化的ギャップの大きい事象（割り勘）の実体験を通して、異文化の中での自分のあり方を考えるということである。従って、この実習については、事前、事後の指導の充実が特に重要になるだろう。つまり、割り勘をすることは実習の課題ではあるが、プログラムの最終目的ではなく、割り勘ができるかできないかではなく、そこで自分がどう感じ、どうしたか、またそれはどうしてか、が重要な点である。このような実習の位置づけが参加者に説明不足であったと思われる。
- 肯定的な評価としては、最も「演出」的な活動の多い青年クラスに関わっ

できたCの”センターの活動が特に「演出」的だとは思っていない。そのくらい強制的なものがないと出会えないのだし、出会いの場が提供されるのはよいことだと思う”との回答が挙げられる。「演出」というプログラムのマイナス面を差し引いても余りある動的情報を得た者であれば、継続参加への意欲を持ってくれるのではないかと期待される。

2)動的情報の生まれにくい活動内容

「教室で自己紹介的な話題で会話する」という活動については、”この活動ではこれ以上の対話は難しい。話題も限られるし浅いものになってしまう。屋外での実習になら参加したい。”との希望や、”コミュニケーションに重点をおくと、コミュニケーションがとれなかったとき相互にがっかりするかもしれないので、コミュニケーション主眼でない実習を導入した方がよい”という意見が参加者から出された。

Dも2回目の実習参加がこの活動だったのだが、動的情報を得られないまま終わってしまっている。しかし、1回目に4人1組で参加したときに日本と中国の挨拶を紹介し合うという活動を通して中国への興味を持ち、それが2回目の参加希望に繋がっているから、このときは動的情報を得られたのである。また、近くの高校で開かれた中国語講座に参加し、その中の餃子教室に講師として来ていたセンターの学習者から”暖かい心遣いを受けて”感激している。その同じ学習者と2回目の実習の場で再会したにも拘わらず、実習はそういった感激の味わえる場ではなかったということになる。面と向かって話すのではなく、一緒に買い物に行ったりお茶を飲んだりといった自然な場ならもっと楽しくできたのではないか”というD自身の発言からも、活動のタイプが動的情報の生成に大きく関与していることが示唆される。

もちろん、活動タイプだけが動的情報生成の要因となるのではないことは言うまでもなく、様々な要因の関与の度合いを考慮しなければならない。青年同士で「待ち合わせて喫茶店でお茶を飲む」という活動は教室での会話実習よりは動的情報の生まれやすい活動ではあるが、参加者によっては喫茶店というセンターの外の環境下で、顔見知りとはいえ日本の習慣に不慣れた学習者をリードしながら過ごさねばならないことから緊張感が伴う活動でもある。この実習に参加して「コミュニケーションの達成感」「参加意義」の

評定のともに低かったケースもある。参加者と学習者のパーソナリティや実施の時期を考慮して実施すべき活動だろう。

3)学習者の対人態度

本研究では学習者からの評価を取り上げていないので、ここで取り上げるのは参加者からの評価に反映されているものに限られる。また、プログラム上の問題点というよりは日常の教授 - 学習過程における教授者の目標設定や指導方法の不適切さに起因すると考えられる問題はここでは取り上げないこととする。(大部分はこの問題である。)

プログラムにフィードバックされるべき学習者側の問題としては、日本人参加者が目の前にいるのに学習者同士ですぐ中国語での会話が始まったり、参加者がいろいろと働きかけても学習者が反応しようとしなかったりといった学習者の態度上の問題がある。一定の話題で会話をする活動においては、やはり”積極的な学習者の方が(自分としては)対応しやすい”との声が出ている。

もちろん、学習者に関しても参加者と同様に、対人接触自体に対する消極性という問題が存在する。しかし、特に学習者の場合、中国語でなら積極的に話す者でも日本語によるコミュニケーションに対しては、自信のなさから消極的な態度をとることが多い。特に青年学習者の中には、参加者とのコミュニケーションには積極的なのだが苦手な日本語使用には消極的で、場が保たなかったという参加者からの声も報告されている。

これについては、学習者に対して言語操作能力だけでなく日本語によるコミュニケーションに対する態度も日本語によるコミュニケーション力の一部であることの認知を促すとともに、動機づけを高められるように、これだけは自信を持って話せるという言語項目の定着を計ることが必要だろう。

2. 外の世界とプログラムとの関わり

1)参加者の動機やパーソナリティ特性(対人接触態度)への配慮

a.中国語

たまたま、団体参加で日本語中心の実習に入ってしまった、中国語ができ

る参加者が調査対象者中にも含まれており、“実習中、学習者の言うことがわかるのに堪えなくてはいけないのは苦しかった”と述べている。

この参加者に2回目は中国語も使用してもらえらる座談会に参加してもらったところ、1回目に評定値が3であった「楽しさ」が4に上がり、“今回のように自由に中国語と日本語が入り乱れて話せるのがいい”との自由記述回答を得た。しかし、「再参加の意志」の評定値は逆に2(=「活動の内容による」)に下がっていた。これはやはり、自分にとって自然な設定でなければ実習を楽しむことは難しいということだろう。

また、今後考慮する必要があると考えられるのは、Bのように初め中国語のできなかったボランティアが継続参加によって中国への関心が高まった結果、中国語学習を始めた場合である。学習者の母文化である中国への関心を参加者が持ってくれることは非常に望ましいことである。しかし、中国語ができるようになればなるほど、日本語中心の活動では動的情報が得られにくくなる恐れがある。もっとも継続参加者には初めから同じタイプの活動参加を呼びかけないようにしているので、問題はその結果参加できる活動が少なくなるということになる。

b.日本語によるコミュニケーションへの欲求と期待

「コミュニケーションの達成感」に対する評定が他項より低いのは全体的な傾向である。継続参加者の動的情報の3項目に対する否定的評価13件の中で「コミュニケーションの達成感」に対するものは9件を占めており、“ことばが通じないと深いところまでは話せない”言葉が通じない点が難しかった”といった記述が散見される。学習者の日本語力の程度を知っていても、やはりコミュニケーションへの欲求から結果に不満を持つという問題である。

c.日本語教育

自己の役割を会話の練習相手と位置づけていた事例としては、Aの“初めは話し相手としても共通のものがなく、しかたなく日本語の学習面のみを考え、自分は日本語の練習台であると割り切って参加していた。話し相手本人に対する興味からではなく話していたので、話題の内容にも興味が持てなかった”という発言が興味深い。コミュニケーションはスキルのみによって成り立つのではなく、コミュニケーションへの欲求に支えられている。欲求の

ないままの会話は、A自身が述べているように”自分が本当に役に立っているのか掴めず、いつも物足りない、中途半端な感じ”で実習を終わることになりがちである。

自己の役割を会話の練習相手と位置づけるだけでなく、逆に、”学習者を自身の日本語教師としてのスキルの練習台と捉える場合もあるのではないか”とは自身も日本語教師養成講座の出身であるAのコメントである。この場合、互いに練習台となることでギブアンドテイクではあるが、やはり話題の内容が目的ではないため、動的情報として共有されにくい。そのような例としては、”もっと日本文化を教えてあげたかった”のにその伝達がうまくいかなかったというものや、”新しい単語を教えても(学習者が)覚えようとしなないのは困る。辞書を携帯するするようにしたらいいのでは”等、日本語学習者に対する教授者、評価者としての立場をとるが故に不全感を感じた参加者の例もある。

Dの場合は養成講座出のボランティアとしてではないが、自己のパフォーマンスについて”もっと中国のこととか日頃からある程度勉強しておいてうまく誘導するべきだったのに...”と否定的である。これは、学習者が話すはずの内容を参加者があらかじめ知っていて、それを学習者から言葉で引き出すことを会話の目的とする見解で、会話を練習台とみなす考えの一つであろう。話し手が何を話すかを予め聞き手が知っていてはコミュニケーションギャップは生じず、コミュニケーションに対する欲求も起こりにくい。その状態で会話を続けるのはかえって容易ではないだろう。

これらの参加者の声は、プログラムの改善(実習目的の説明と活動の内容と方法自体の改善)の必要性を改めて示したものと見える。

d. ボランティア観

また、奉仕型のボランティア観から参加し、ただ学習者の相手をするだけの活動に”本当に役に立っているのか”とAは物足りなさを覚えていた。

ボランティア観については、センターから参加者に対してアピールしてきたのだが、Aによれば、センター側の意図は参加者には伝わっていない。

結局、Aは自力でそれを達成するのだが、それは偶然のきっかけによるところが大きかった。そこでAはセンターに対して、このことはもっと強調す

べきだとの要望を発している。参加者に対する説明においては動的情報の領域についてだけではなく、それを支えるボランティア観そのものについても明確に言及すべきであったと思われる。

e. 対人接触への消極性

対人接触への態度も動的情報の獲得に影響したと考えられる例としてDの事例を取り上げたい。Dは”もともと話し上手なわけでもなかった”との自己認識を持っていたが、実はこのときの実習の相手学習者の方も、日本語はある程度既習だがたまたま中国語でも話し好きな人ではなかった。この両者の間で会話は一問一答で途切れ、双方とも話を進める糸口が見つけられずに終わってしまっている(ビデオ観察による)。コミュニケーションは相互作用であるから、どちらか一方だけでも積極的に話を展開しようとすれば相手の方もそれに引き出されて何とかなる場合はあり得る。問題はこのときのように双方ともそういう積極的なタイプではなかった場合である。

これは人と話をすることの好き嫌いという態度の問題であるから、いかに教授者といえども踏み込むことのできない領域であろう。教授者にできることはせいぜい学習者にその気になったときに使える技術を伝達することである。まして参加者に対してはその機会も権利もない。

しかし「口下手」なボランティアがそういう活動には向いていないからと参加を断るのでは、-4.で挙げた「関心はあるがそれほど積極的に行動してこなかった」者には参加の可能性が閉ざされてしまいかねない。それでは地域社会に向けてセンターを開くことの意義が半減されるだろう。

さらにセンター側が留意すべき点として、このときDは教授者が活動内容について説明し、ビデオ撮影について事前の了承を願い出たのに対して異議は唱えなかったのだが、後日のインタビューにおいて、実習時はかなり戸惑ったと述べている。そのように人の言葉(しかもここでは客である参加者にとって相手は主人役といえる立場である)に積極的に異議を唱えたり、また希望を主張したりすべきではないという価値観は珍しいものではない。我々の方が日頃自分から一人でセンターに飛び込んで来てくれる積極的なボランティアばかりを対象としてきたために、積極的に自己主張するタイプでないボランティアの心的態度に対する配慮に欠けていたところがあっただろう。

今後センターが地域に向けて積極的に自らを開いていくにあたって、今まで受け入れてきたボランティアに対して行ってきたのにもまして配慮が必要であるということが示唆される。

2) 継続参加に伴うマンネリ化

マンネリ化は活動タイプとも大きく関わっているように思われる。教室で会話をするのは限界があるので、戸外での実習に誘ってほしい、との要望や、同じく教室での会話という活動における、“(学習者の日本語力は) 前回より進歩しているが、あれ以上の時間(場を保たせるの)は無理かな” との悲観的な評価が見られた。

呼びかけ側としては、普通、同じタイプの活動に何度も参加依頼することは極力避けているのだが、この活動の場合は、どのタイプの実習にもほとんど付随して実施されていることから一人の参加者の複数回参加という事態が起こる。そのため、この活動においてマンネリ化を感じる事例が多い可能性もある。

いずれにしても、この活動が広く行われていることから起こる問題であり、活動タイプ自体の見直しおよび内容・方法の改善と併せて検討すべき問題だろう。

3) 負のフィードバックの供給断絶

今回、初めてDを負のフィードバックの事例として取り上げたが、今後は恒常的なフィードバック回路をプログラムに組み込む方策が必要だろう。

3. 外の世界とセンターとの関わり

1) 研修中という環境の限界と学習者参加者双方のプライバシー

Cから、“ボランティア参加者が学習者と親しくなっているのか、と迷った” という声があった。このような参加者のより親密な交流に対する意欲の発生は、特に2世学習者の実習プログラムの目標としたい部分でもあり、大変貴重な申し出である。しかし、3 3)でも触れたように、4ヶ月の研修期間は、センターとしては研修生としての学習者の安全、その他を保障するた

めに、その交際の範囲を限定せざるを得ない。従って、原則として参加者と学習者との接触を実習の場に限っている。

しかし、先にも述べたように、実習の目標を学習者が日本人青年と友人関係を結べる可能性を感じることにするならば、そのプログラムをそのような条件を満たす可能性のあるものにしていかなければならないだろう。そして、Cのケースのように退所後の関係にまで繋げることができれば、それは4ヶ月の成果といえるのではないか。

2)場の限定性

今回の調査で、BとCが日本ですでに生活している帰国者と接する場を自ら求めていったことが示された。その結果、Bは”実習に参加するだけというのは、表面的なおいしいところを経験しているだけではないのか”と悩むことになるが、それは彼女がセンターの外に広がる現実を見ていく過程であった。Cは退所生の自宅を訪ね、彼らと日本人との交際のなさ加減を知ったことがボランティア観の形成にも寄与している。実習参加者が彼女らのように自ら「外の現実」とも繋がっていき、それをまたセンターにフィードバックしてくれることはセンターが外部の人の視点を得られるという点で非常に望ましいことである。

これまでセンターは参加者が外の現実と繋がっていくことに関する情報提供に積極的であったとはいえない。それは現在預かっている学習者で手一杯だったという事情もある。しかし、今後の方向としては可能な範囲でこうした「外の現実」とセンター自身も繋がりを持ち、実習参加者にもそれに関する情報を提供できるようになることが望ましいだろう。

3)参加者からプログラムを超えたセンター全体へのフィードバック

ここでは、センター教師間における「異文化適応教育」の方針の徹底ないし共通理解が得られていないことが、ボランティアの指摘という形で外部からフィードバックされた一件に言及しておきたい。

直接のきっかけとなったのは、実習後の質問紙回答において出された、Bからの”センターは学習者が日本的なやり方ができるかできないかを問題に

するが、それは日本への同化をさせようとしていることではないのか、教師の学習者に対する接し方もそれができていない者としての扱いなのではないか”との疑問だった。この疑問に対しては、学習者の異文化への態度を測定評価しようとするれば、それを外に現われる技能として測定することが必要になる場合もあることは説明すべきである、その他のことについては教師側に問題があった、とセンターでは判断した。

ちょうどボランティア等がセンターを訪れる頻度が増えてセンターが外部の目に曝される機会が多くなってきた時期だったこともあり、教師の学習者に対する言動について、センター教師間で事例を集めて問題点を話し合う場を設けた。同時にBの方には、上述のことを呼びかけ係から私信で伝えた。内部での話し合いの結果、教師の学習者に対する言動についてそれまで無自覚になされていた様々なことが意識化されたが、本質的なところでの共通理解にはまだ時間がかかると思われる。

これはプログラム以前の教授者側の異文化に対する態度上の問題と学習者の態度の測定方法の妥当性が説明不足のため参加者に理解されていなかったことが複合して起こった問題である。どちらの問題にしる、センターにとっては外部参加者からのフィードバックの重要性が認識された一件であった。

4)外部とのネットワーキング

a.センターから地域へのアピール

地域住民であるDはセンターについて特にイメージを持っていなかった。実際には市民のどれほどの人がセンターについてどのようなイメージを持っているのかをセンターはまだはっきりとは把握していない。しかし、センターや帰国者に対する地域住民の社会的態度は今後センターが、地域に向けて発信していく上で把握しておく必要がある。

b.ボランティア同士の横の繋がり

Aからボランティアとしてセンターに関わる者として他の参加者とボランティア観に関して意見を交換したいという要望が出された。他のボランティアと意見を交換することでボランティア観の相互学習も可能となる。今後の方向としてこうしたことも実現に近づけられることが望ましい。

おわりに

以上に見てきたように、交流プログラムは様々な問題を抱えつつも、センターと外の世界との結びつきのより有効な形を目指して実践の途上にある。この実践は、学習者、参加者にとってのみの動的情報獲得の機会でなく、本プログラムのコーディネーターである教師にとっても、様々な発見や新たな気づき、喜びや反省の場となっていることをつけ加えておきたい。

このような学習者、参加者、教師の三者の相互作用の機会や場を、プログラムの中に、また、システムの中に作っていくことが実習の活性化を生み、その意義を高めて行くのではないかと思う。本研究は、そのような回路づくりの一過程であり、今後も本交流活動を通して獲得されたものをプログラムやセンター全体のカリキュラムに還元していくための、より安定した回路づくりを行って行かねばならないだろう。そして、それを帰国者の生活の場である日本社会に対しての、情報発信、受信の一基地となるための試みとしたい。

また、今回は取り上げなかったが、学習者/教授者による評価のシステムの改善も続けて今後の課題である。

最後になるが、今回快くインタビューに応じて下さったボランティアの皆さんに心から感謝の意を表したい。紙幅の関係で、ここではすべての方の意見を取り上げられなかったが、いただいた意見が今後のセンターに生かされるよう努力していきたい。

注

- 1) ここでいう「ボランティア」の規定は、紀要第1号に準じ、「ネットワーク者としての教授者の働きかけに無償で応じてくれる者」とする。したがっていわゆる日本語ボランティア(ボランティアで日本語を教えている者)を意味しない。
- 2) 以下、記述の便宜のため、参加者に対する敬称、待遇表現等を略させていただいた。
- 3) 交流活動を含む一連の学習活動(詳細は、紀要1号佐藤他(1993)を参照)
- 4) この3つはセンターのカリキュラム中では と が中目標2、 が目標3に属する。(目標構造については本紀要「カリキュラム開発および理念的目標の構造化について」参照)
- 5) 第41期では、その試みの一つとして、所沢地域住民に対する実習参加の呼びかけの試みを行った(詳細は資料3を参照)
- 6) aについては、ボランティア団体自体が参加呼びかけの窓口となっており参加システムがb~eと異なること、センターで個人の参加状況データを保持していないこと、常に団体としての参加であるため参加動機に偏りがあると予想されることなどから今回の調査対象としなかった。a参加者についての問題と対処の試みについては、本紀要「センター支援団体会員との交流活動プログラム活性化のための実践報告」を参照されたい。
- 7) もともと帰国者支援ボランティア活動等に関わっていた者を除外したのは、これらの参加者が、今後センターが呼びかけを拡大しようと考えている地域住民層と異なり、帰国者問題や中国文化にある程度通じており、参加動機もある程度限定されると判断したためである。また、参加全回が研修や単位のための参加者も第一の動機が固定されていることから対象としなかった。念のために、これはもちろん、これらの人たちが他の動機を持つことおよび実習に参加することによって関心が移ったり拡大したりする可能性を否定し言うのではない。
- 8) なお、4ケース中3ケースは所沢市近隣の住民ではなく、地域社会において懸念されていたようなセンターについてのステロタイプのイメージを抱いていなかった。所沢市在住のDも特にイメージは持っていなかったという。日常目にしていながら市民にとってセンターがそれほど遠い存在であるということになると、こちらの方も問題が大きい。
- 9) 宿舎に住んで研修中である学習者との個人的な交際は管理上限界がある。
- 10) 継続参加者32人(延べ実習参加回数78回)中で、評定値が4段階の2.5以下のものは11人13件あった。「コミュニケーション」に対するものが9件、「参加意義」に対するものが3件、「参加の楽しさ」に対するものが1件である。

引用/参考文献

- ・朝日新聞社編(1994)『ボランティアの本』、朝日新聞社。
- ・井下理(1991)「地域社会の国際化」、高橋順一他編『異文化へのストラテジー』、川島書店。

- ・江橋崇編著(1993)『外国人は住民です』, 学陽書房 .
- ・金子郁容(1992)『ボランティア - - もう一つの情報社会』, 岩波新書 .
- ・『月刊社会教育』編集部編(1993)『日本で暮らす外国人の学習権』, 国土社 .
- ・細川英雄・北村真佐子(1993)「ボランティア活動と『日本事情』」, 『月刊日本語』1994年1月号 .
- ・佐藤恵美子・馬場尚子・安場淳(1993)「実践報告：ボランティア参加型学習活動」, 『中国帰国孤児定着促進センター紀要』第1号 .
- ・佐藤進編(1992)『外国人労働者の福祉と人権』, 法律文化社 .
- ・高橋順一他編(1991)『異文化へのストラテジー』, 川島書店 .
- ・御堂岡潔(1991)「外国イメージとマスメディア - テレビの役割 - 」, 高橋順一他編, 上掲書 .
- ・安場淳・池上摩希子・佐藤恵美子(1991)『体験学習法の試み』, 凡人社 .
- ・渡辺文夫(1991)「国際人養成のための異文化への教育的ストラテジー」, 高橋順一他編, 上掲書 .
- ・渡辺文夫(1992)「異文化接触へのストラテジー」, 渡辺文夫・高橋順一編『地球社会時代をどう捉えるか - 人間科学の課題と可能性 - 』, ナカニシヤ出版 .

[資料1] ボランティアの実習参加システム

1) ボランティア登録システム (パソコンのデータベースを利用)

参加希望を表明する者に対しては、平日の昼間に無理なく参加でき、かつ学習者との中国語の会話練習を目的とするのではないことの2点を確認する(土日のみ参加可能な人には、センター支援が目的の地域のボランティア団体を紹介するようにしている)。

登録項目は、参加動機、都合のいい曜日・期日等、中国語能力(自己申告による)、前回までの参加実習の活動内容と相手学習者のタイプ、参加希望の相手クラス、前回参加後の質問紙の「再参加の希望」評定(4段階で2以下の人は原則としてリストから削除)、これらに加えて、実習時の様子(楽しんでるようか等)についての担当者の観察結果も必要があれば入力しておき、次回呼びかけの際の参考とする。質問紙の回答にはどうしても主催者であるセンターへのバイアス(遠慮や社交辞令)がかかるものなので、評定値だけでなく観察等を参考にできるだけ総合的に判断するようにしている。

2) 参加の流れ (以下の2通り)

・団体参加の場合: 団体からセンターに参加希望の申し出が来る。センターと協議の上、日時や人数を決定する。各クラスに係が実習希望の有無を問う。センター内で希望人数の調整する。

・ボランティアに参加を呼びかける場合: 担当が係に日時、活動目的、内容および希望人数を告げて依頼する。係が候補者をデータベースから抽出し、電話で参加を呼びかける。決定し次第、クラス担当が参加者に電話で実習目的や方法について事前の説明を行なう。

候補者抽出に際して考慮している事項は、原則として学習者と年代の近いこと/活動内容が参加動機と大きなずれのないこと/マンネリを避けるため同じ活動内容の実習に以前に参加したことのないこと/日本語によるコミュニケーション実習の場合、中国語ができる参加者に対してもできないふりをしてもらうことになるので、中国語能力のあまり高くないこと/居住地域が遠すぎないこと等等である。

なお、実習の活動タイプは大きく以下の5つに分けられる。

- ・一定の話題を巡って少人数でコミュニケーションを図る活動
- ・通訳を介して日本と中国の文化の違いについて討論する「座談会」
- ・ともにスポーツや娯楽を楽しむレクリエーション的な活動
- ・料理や歌など文化紹介的な活動
- ・買物や交通手段利用などの日常生活場面の行動達成を補助する活動

3) センター側から参加者への働きかけ

参加者とセンター側との接触は事前の電話連絡を除けばほとんどの場合当日のみになる。現在センターが行なっているのは以下の3点である。

実習の目的や活動内容等を載せた簡単なリーフレットの事前送付

センターが事前に把握した或いは推し量ることのできる範囲での参加者側の動機を前提にした、実習趣旨への理解を求めするための実習直前の説明会

参加者にとって目的の達成度、センター側の掲げる趣旨の理解度、学習者側の達成度などについて意見を交換する、実習直後の感想会

(と並行して実施) 実習に対する評価を問う質問紙調査(資料2)

[資料2]

差し支えなければお名前を()

実習に参加して下さった皆さんへ: ()年()月()日()番教室

本日は当センターの実習にご協力ありがとうございました。当センターでは、学習者が少しでも日本の生活へのイメージと自信・意欲を持ってくれることを願って授業を行っています。そして、本日のような交流を通して、学習者・ボランティアの皆さんが共に言葉の通じにくい相手とのコミュニケーションに親しみ、互いの文化への理解を深めることができれば、と考えています。

以下、今後のセンターでのよりよい指導の参考にさせていただくため、アンケートのご協力ください。お答えを他の目的に利用することは一切ありませんので、どうか率直なご意見ご感想を！今後ともご協力よろしく願いたします。

・参加の主な動機：(複数回答の方は、3位までの順位を()内にご記入下さい)

- a. 帰国者及び二世三世への教育 ()
 - b. 広く日本語教育全般 ()
 - c. a以外で広く帰国者問題全般や当センター ()
 - d. 異文化間教育、異文化交流 ()
 - e. ボランティア活動自体 ()
 - f. 中国文化、言語、歴史(現代史も) ()
 - g. 学校や団体の研修や授業の一環で参加 ()
 - h. その他 [] ()
- ・今回で参加は： 回数 ()
- ・前回参加： 年 月 日 ()
- ・中国語は？ 可・日常会話・ ()
- 挨拶程度・不可 [] ()

以下の問いにはそれぞれ4段階の自己評価および自由記述でお答えください。

1. 実習に参加してみて、楽しめたか? () 4 () 3 () 2 () 1 楽しめな () 楽しめましたか? () かった ()
どんな点で?
2. あなた自身にとって実習は あった 4 () 3 () 2 () 1 なかった ()
意義がありましたか? ()
どんな点で?
3. 実習に参加してみて、何か あった ()
「気づき」や発見がありましたか? () 4 () 3 () 2 () 1 なかった ()
・どんな点で?
4. センター学習者には何か発見や あった ()
「気づき」があったようですか? () 4 () 3 () 2 () 1 なかった ()
・どんな点で?

あった

5. コミュニケーションが取れ 4 () 3 () 2 () 1 なかった ()
たという達成感、予想と比べてどうでしたか?
・どんな点、どんな話題で?

よかった

6. 今回の企画のアイデア 4 () 3 () 2 () 1 なかった ()
自体はどうでしょうか?
・どんな点で?
7. 今後、センターの実習への参加について

- | | | | |
|------------|-------------|-------------|----------|
| 4 () | 3 () | 2 () | 1 () |
| ・何とかして () | ・都合がつけば () | ・活動の内容に () | ・何とも () |
| 参加したい () | 参加したい () | よる () | 問8 () |
| | | | 言えない () |

上で4.3の方はご連絡先及び都合のいい曜日、電話をして構わない時間帯等の情報をお願いします(既にお知らせ下さっている方は変更事項のみお知らせ下さい)

8. 今後の交流の場や活動として、何かアイデアがあればどうぞ(特に問7で2とお答えになった方はぜひ！実現可能なものは実施していきたく思います。
9. その他、今回の実習やセンター教師側の対応で「もっとこうしてはどうか? こうした方がよかったのでは?」という意見も含めて、ご自由に！また、何回か参加して下さっている方で、あなた自身や学習者の変化について何か気づかれた事がありましたら、お書きください。

ご協力有り難うございました!

[資料3] 第41期における地域住民に対する実習参加の呼びかけの試み

呼びかけは、二段階で行なわれた。まず、所沢地域の住民が集まると思われる公的施設でのチラシ、ポスターを使った呼びかけである。第二に、情報媒体（ミニコミ広報誌、新聞・ケーブルテレビスポット等）を通しての広告による呼びかけである。以下、結果をまとめる。

・公的施設を使った募集

募集地域はセンターまで1時間以内で来られる地域の公的施設（公民館11カ所、図書館、郵便局、市役所、市民会館、市民文化ホール各1カ所）で、それぞれチラシやポスターを置かせてもらった。

応募結果は、公民館2件、図書館2件、郵便局2件であった。公民館は地域ボランティア活動に興味のある層が多いかと想像されたが、ここを訪れる人々は既に公民館活動に余暇を使っている人が多いので、反応が鈍かったかと思われる。結果として、図書館や郵便局など様々な層の人々が入り出すような場所の方が人の出入りも多く、呼びかけ場所として適しているようだ。また、チラシよりも人の目に触れやすいポスターが効果的だった。

・情報媒体を使った募集結果

所沢市とその周辺の市における新聞媒体（折り込み広報紙2紙、会員制ミニコミ紙2紙、ミニコミ新聞1紙）およびケーブルテレビ地域活動紹介スポットに1回、募集広告を掲載してもらった。

結果は、折り込み広報紙による応募が44件、会員制ミニコミ紙によるものが1件あった。これは予想以上の反響であった。特に、新聞に折り込みされる広報紙による反応が大きかった。やはり、メディアの量的宣伝の効果は高いと言える。応募者の性別・年齢は[表E]の通りである。最も多い層は、40代の女性18人で、次に多いのが50代の女性12人と他を圧倒的に引き離し多かった。また、44名中、7名が中国語のできる者であった。この割合は一般社会の現実から考えればかなり高いと言えるだろう。

参加動機としては、「子どもも手を離れて時間ができ、ボランティア活動は未経験だが何かできれば」、「中国語ができるので何か手伝いたい」という申し出、「退職して時間ができた」などであった。概ね、近所にあり日頃から見聞きしてはいるが、未知のセンターに対する興味もあったと思われる。

また、10～20代の青年層からの応募も10件有り、地域社会から青年が交流活動に参加するという、青年ボランティアに新しい参加経緯が生まれた。

今回初めての一般公募の試みであったが、地域住民のボランティア登録者の増員と、地域とのネットワーク化の試みとして、効果があったといえるだろう。

[表E]

性別	10代	20代	30代	40代	50代	60代	計
男性	1	1	0	2	0	0	4
女性	3	5	3	16	12	1	40
	4	6	3	18	12	1	44

[資料4] A)B)個々のケース記述

[ケースA] 主婦、43歳、東久留米市在住、参加開始：1992年11月

センターに来るまで：15,6年前フランスに4年半滞在し、異国に暮らす事の大変さを実感した。また、日本語教師をしている人と友人になり、外国語として日本語を教えることに関心を持った。帰国後、子供も手がかからなくなってから日本語教師の養成講座に通い始めた。

帰国時にちょうど中国残留孤児の第1回訪日調査があったため、自身の滞仏経験と重ね合わせて関心を持ち、目にふれる範囲で孤児に関するテレビ報道を見たり本を読んだりしていた。報道の与えるイメージが「やっと祖国に帰れた」というものだったので、「早く帰りたいかっただろうな、早く日本に慣れて日本のことがわかるといいな」と思っていた。この時点では帰国者＝日本人と思っていた。中国のことは何も知らなかったし、接点もなかった。養成講座で所沢センターの指導方法について知り、家から近かったこともあって「何かお手伝いできれば」と思い、電話をしてみた。しかし、そういう枠はないと言われてそれっきりだった。(調査者：その後2年ほどしてからセンターの方から依頼して実習に参加してもらったことになった。)

当時のセンターのイメージは、「社会復帰の訓練の場」。期間が4ヶ月というのは短い！修了後すぐ日本社会に放り出されるのだろうか、フォローはどのようになされているのか、どのようなボランティア活動が行なわれているのかということに関心があった。

実習に参加してみて：センターが日本社会への入り口ならば、自分が居間や広間へ通じる廊下の役目ができればいいと思った。しかし、帰国者問題やセンターの教育の全体像が見えず、ボランティアはどのように手伝えればいいのか、どのような援助が必要とされているのかも説明されないのが戸惑うところがあった。

話し相手としても共通のものがなく言葉も通じないため、楽しむというところまではいかなかった。しかたなく日本語の学習面のみを考え、自分は日本語の練習台ボランティアであると割り切って参加していた。つまり話し相手本人に対する興味からではなく話していたので、趣味や中国の出身地の話などの話題の内容にも興味が持てなかった。しかし、これだと自分が本当に役に立っているのか掴めず、いつも物足りない、中途半端な感じだった。自分だけでなく、日本語教師養成講座出身のボランティアの場合、このように互いに練習台と考えている人が多いのではないか。

(2回目) そう思いながらも、こちらの聞きたいことに相手学習者が答えてくれると、少しその人のことがわかったような感じがした。学習者のことを日本人だと思っていたが、外見が似ているだけに思い及ばない生活習慣の違いがあることがわかってきた。自分を含めいろいろな日本人に出会うことが彼らのこれからの生活に役立てば、と思った。

しかし、さすがに3回目には肩の力が抜けてきたと感じられた。その上、このときの活動が中国の餃子教室で、一緒に料理をするという共通の行動があったため、学習者との距離が非常に縮まった気がして楽しかった。やはり共通のものがあつた方が会話も成り立ちやすい。また、料理を含め自国の文化全般に学習者が誇りを持っていて毅然としていることが感じられた。こういう共通のものがある活動に参加したいと思った。

4回の実習は前前回と同じような活動内容だった。ところが、偶然中国で国語の教師をしていた人と2対1で話すことになり、自分自身、以前国語の教師を

していたため、その人に対する興味が自然に湧きおこってきた。互いに興味の持てる話題に巡り会い、無理に話そうとしなくても会話ができる。このときのコミュニケーションは結局筆談に頼ることになったが、得るものが多かったと初めて感じた。それまでは自分が何かこの人たちのためにやらなければならないと思っていたのが、この人は中国でどうしていたのかという興味から中国のことを知りたいと思うようになり、気持ちの上で変化があった。漠然と出身地や趣味のことを聞くよりも共通の話題について話せた方がずっといいと思った。4回目で、何をどうすればいいのかがやっと見えてきた気がする。

それまでもセンターからは、中国のことも聞いてみるようにとの事前説明があったが、その意図がわからなかった。実習後の質問紙の「何か発見や気づきがあったか」という項目を見ても、こちらから得るものを期待して行ったのではなかったもので、どうしてこういう項目があるのかと思っていたほど。「参加者も得るものがあるべきだ」とセンターの方から参加ボランティアに対してもっと強調してほしい。

帰国者観にも変化があった。配偶者の人はもともと中国人なのに、4回目の出会いがあるまで中国人として彼らが暮らしてきたことを自分が認めていなかった、ということに気づいた。そして、帰国孤児本人のことも初めは日本人だと思っていたが、実習に参加するうちに、彼らの40~50年も過ごしてきた中国人としての時期を否定しない方がいい、それはそれで大事にしなければと思うようになった。彼らが向こうでのそれなりの仕事や暮らしを捨ててまで帰って来ている気持ちは自分には推し量れないが、文革(=文化大革命、当時日本人だという理由で迫害を受けた残留孤児は少なくない)とかいろいろこちらにはわからない事情があるのだろうと思う。

センターは、そうした彼らが日本に溶け込めるようにと考えていろいろやっている所であると捉えている。外に向けても、もっとPRすべきではないか。実施上難しい点もあるかと思うが、外に向かって開かれているといいと思う。小学校5年生の自分の子供も、連れて行ってセンターを見せたいと思っているのだが、子供同士の交流は実現可能か。

また、ボランティア同士の横のつながりもほしい。実習後の感想会でもその実習についてだけでなく、ボランティアとして参加することの意味等について他のボランティアと話し合えるとよいと思う。自分自身いろいろ迷いがあり、他の人の考えも聞きたい。今は個人とセンターという一本の線のつながりしかない。

今後の実習参加について：やっとやり方が見えてきた。共通のものを見つけていくことができるような活動に参加したい。しかし、センター実習の場合は、いきなり初対面の者同士が対面する場面に放り出される。これは不自然だ。たとえば、仮に相手が近所に住むというだけの関係の外国人だったとしても、「近所」という共通項がある。間に立つ人(この場合は教授者)から共通の話題について多少の示唆があると助かるのだが... (それはそれで不自然さがあるのでは、という調査者の質問に対して)今のところ、いいアイデアがないが...

言葉の通じにくい人とのコミュニケーションについて：共通のものが見つけられればコミュニケーションはできるし、得るものがあると思う。

〔ケースB〕百貨店勤務、27歳、鎌倉市在住、参加開始：1991年7月

センターに来るまで：勤務の傍ら日本語教育に関心を持ち、現場を見てみたいと思っていた。センター講師である大学の先輩から、センターが外部の実習参加

者を受け入れていることを聞き、参加を申し入れた。センターのことは、報道等から、こういった機関がどこかにあるだろうと思っていた程度。帰国者については、もとは日本人だったのに苦労してやっと帰ってきた人というイメージを持っていた。また、中国や中国人との接触は大学の第二外国語の講師ぐらいしかなく、同じアジアの人ぐらいいしかなかった。

実習に参加してみても、最初は、ただ興味から偶然のように参加するようになった。そのころは何の疑問も持たずに「実習の試みは素晴らしい」と思っていた。

2～3回目の参加時に同席だった帰国者支援団体の会員に誘われ、実際に生活しながら日本語を学んでいる帰国者の日本語教室を見学に行った。そこで、社会の現状や帰国者の置かれている境遇について聞いたり垣間見たりし、また帰国者の権利を行政側に認めさせようとする運動の理念等について話を聞き、圧倒された。自分に何ができるのか、実習に参加するだけというのは表面的なおもしろいところを経験しているだけではないのか、といろいろ考えてしまった。

実習に参加するようになって、「割り勘」を嫌うなどの中国文化の大陸的な考え方に触れ、帰国者の人たちは中国の人なんだと思うようになった。この頃から中国語の学習も始めた。

(同、4～5回目) 青年学習者との実習で、学習者が日本の若者より素直で明るいと感じ、また男子学習者は日本人より照れ屋だと思った。

このときまでの参加でセンターの基本方針に対する疑問が生じた。センターは「日本と中国の文化の違いを知った上で彼ら自身がどうするかを選び取っていくことが大切だ」というが、自分の参加した実習の印象では、センターの方針が「いかにして日本のやり方に合わせるか」であると感じた。「日本式のやり方ができるかできないか」によって学習者を評価しようとしている教授者を見たが、これには疑問を感じた。異文化間コミュニケーションは互いに最初は「？」と感じるところから出発するものだと思うが、そこでなぜ帰国者側だけが態度を改めなければならないのだろうか。帰国者は閉鎖的な日本社会の中で非常に貴重な存在であるはずなのに。

(これに対して、呼びかけ担当者から、センターの基本理念のセンター内部での不徹底の問題と、学習をスキルの習得を以て評価しようとする場合にはできないかを判断の基準とするということを書面で伝えると共に電話でも話をした。センター講師側へもBのコメントを伝え、これをきっかけとして学習者とのあるべき接し方について講師間で話し合いを行った。)

(時期から1年半後、久しぶりの参加である：5～6回目) 中国と日本の職場事情についての座談会で、日本社会やその他の社会について考える機会となった。いつも実習後に、座談会の時間が短いという声から他の参加者から出されるが、大事なものは実習後の授業で日本と中国の違いを確認し、今後こういう場面に遭遇したときに学習者がどうするかを自分で考えてみることだと思った。一回一回の実習が自分にとっても帰国者の人たちにとっても大切なものなのだと思うようになった。

(6～7回目) センターが帰国者を日本社会に同化させようとしているという印象を持つようになっていたが、さらに、これはセンターの問題ではなくて、日本社会全体の問題であると思うようになった。センターは、帰国者がこの同化への圧力に流されないで自分で選べるようになることを目指しているのだろうと思う。また、いろいろな講師と接し、センターといっても教授者によって考え方もそれぞれで一概に「センターは」と言えないと思った。

このときまでには、帰国者の人たちは中国文化の人だと思いうようになっていた。しかし、このときの実習で小さい頃の日本人としての記憶が残っている帰国者学習者と初めて接して苦労話を聞く機会があり、この人たちは日本人なんだと改めて気付かされた。また、その分だけ「日本人なんだから」というプレッシャーも強いように思った。インドシナの難民センターにも見学に行ったことがあるのだが、そこでは「日本人から見ておかしくないか」とまでは指導していないようだったので、やはり帰国者への日本社会のプレッシャーの強さを思った。

そして、今回の活動内容がスーパーでの買い物場面のビデオ撮影の補助だったこともあって、帰国者が特別な人ではなく、電車に乗り合わせるかもしれない、本当に隣近所になるかもしれない人なんだなあと感じられるようになった。

今後の実習参加について：異文化間コミュニケーションの機会として、また戦争の生き証人として歴史の重みを学ばせてもらえる場として今後も参加したいと思っている。

言葉の通じにくい人とのコミュニケーションについて：まだまだ閉鎖的な日本社会であるが、だからこそこれは大切なことだと思う。また、最近では日本社会も変わってきている。これを促進するために、日本語教育の教授法も、言葉のみの指導でなくもっと研究されていいと思う。帰国者とのコミュニケーションの場合、互いに漢字が書ければ筆談だけでもかなり複雑なことも言えるので、伝えにくいもどかしさはあっても自分の知らないことを教えてもらえる喜びがある。

〔ケースC〕大学生、22歳、小金井在住、参加開始：1992年7月

センターに来るまで：センターについてのイメージは特になかった。帰国者や中国人については、地味とか暗いといったイメージがあった程度。

実習に参加してみて：1回目は授業（「異文化適応訓練法」）の一環として参加したので、特に何かを求めて来たというものはないが、学習者がとても明るく親しみやすく接してくれ、楽しい時を過ごすことができた。言葉は話せなくても共通の漢字で分かりあえたことが嬉しかった。しかし、同時に筆談でも伝わらないことに対してあせりやもどかしさ（自分に対して）も感じた。

（2回目：1回目と同じ学習者と）筆談では単語ぐらいは理解できても、それに対して何が言いたいのか聞きたいのかということまでは伝えきれない部分があり、少しとまどった。それにしても、やはりお互い話したい聞きたいことがたくさんあると思うので、時間がもっとあるといい。しかし、短時間ずつでも回を重ねれば、けっこういろいろ話せるのではないかと思った。

彼らと交流することで、帰国者に対してはもちろん中国にも親近感が生まれてきた。また、互いに2回目だったので、双方とも初対面のときの緊張がとれて、すっと打ち解けることができた。

（3回目～4回目：前回から半年後、2回目るときとは別の青年学習者と）青年学習者はやはり日本の同年代の子のおしゃれだったり歌の好みも似ていたり共通のものが多く、互いに親しみが持てた。同じ学習者と続けて会うことで、友達感覚で気軽におしゃべりができた。こうして仲良くなれた子たちとは実習外でも交際を続けたい（文通したり家に遊びに来てもらったり）し、彼らのセンター修了後も個人的な友人関係を続けたいと思うようになった。

このころには帰国者に対する「暗い」といった偏見もすっかり消えて親近感を持つようになった。帰国者の人たちは日本人と比べて気持ちのよい、つきあいやすい人たちだと思う。これは彼らが帰国者だから却って日本人との交際に積極的

であるということなのだろうか。

4回目の実習はそれまでのようにセンター内での活動でなく、駅で待ち合わせをして喫茶店で一緒にお茶を飲んでおしゃべりをするという、日本人の友人同士のような外の社会に紛れこんでの活動だった。その活動を通じ、彼らも日本の若者と同じなんだ、普通に付き合える相手なんだとわかって距離感が縮まり、彼らとの関係を自分自身の友人関係の一部にしたいと思うようになった。しかし、彼らのことを中国人あるいは日本人のどちらかと思って接すればいいのかわは迷いがある。結局自分と同じ人間なのだなー、と考えているが..。

(「センターの活動は『やらせ』的では？」という調査者の問いに対して)センターが「やらせ」的だとは特に思っていない。そのくらい強制的なものがないと出会えないのだし、出会いの場が提供されるのはよいことだと思う。自分にとってもいろいろなきっかけになるし。

このときの交流相手の学習者とは、彼女の家を訪問したり年賀状の交換をしたりと交際を続けている。今後も、細々とでもこうした交際を続けていきたい。

5回目はこれまでと違って孤児世代の学習者との交流だったが、自分の方も初めの頃に比べて日本語に不慣れな人との交流にもかなり慣れてきて溶け込みやすくなっているのに気づいた。

今後の実習参加について：何か助けになりたいし、自分で役に立てるなら立ちたいので、また参加したい。帰国者二世の彼らにとって自分が日本で最初の友人となれたら嬉しい。助けになりたいなどは最初のうちは考えていなかったが、センターで会うたびに退所後の彼らのことを考えたり、退所後訪問した一家の日本人とのつきあいのない様子などを見たりするうちにそう思うようになった。自分に大したことができるとは思わないが、彼らにとって最初の日本人の知り合いが彼らのことをわかってあげようとする友人であれば、彼らの心の支えとなるのでは..。

自分にとっても友人が増える喜びがある。自分にはこれまでに外国人の友だちはいなかったし、変わった境遇の人と出会えるのは有意義だ。それに、自分のことだけでなく、「人のことも考えられる自分」を学ぶことができる。

ただし、これに関しては、ボランティア参加者が学習者と個人的に親しくなってもいいのかわと迷った。そういう可能性があるのなら、センターの方からもそのようにこちらに伝えてほしい。

言葉の通じにくい人とのコミュニケーションについて：もちろん限界はあるが、そのとき理解できる範囲でつきあっていけばいい。自分が中国語ができるようになることはないだろうが、相手の人の日本語力が高くなってくれば、コミュニケーションも楽になってくるのではないかと考えている。

〔ケースD〕主婦、30歳代後半、所沢市在住、参加開始：1993年7月

センターに来るまで：センターに対して、また帰国者に対しても特にイメージをもっていなかった。中国についても知り合いに中国人もいないし、イメージもなかった。子供の中学校のPTAの社会教育研修の一環として23名で参加した。

実習に参加してみて：中国語や中国に関する物事に初めて触れ、中国のことを全く知らない自分に気づいた。帰国者の人は向こうで長年生活してきている人だから、中国人なのだろうか？何ともいえないが..。

また、学習者の日本語学習に対する一所懸命さに打たれた。

その後、近くの高校で公開中国語講座が開かれると聞き、中国のことを少しでも

知ろうと思って通い始めた。(筆者：この講座にはセンターの青年学習者がアシスタントとして出席していた。)最終回は中国餃子の作り方教室で、孤児世代の学習者が講師として招かれており、顔見知りになった。そのときのお茶の勧め方一つとってみても大変暖かい心遣いをしてくれて感動した。

センターの4ヶ月はいろいろ考えられているようで学習者は恵まれている。本当に大変なのはセンターを出てからだろうと思った。

2回目のときは1回目のような4人1組ではなく、いきなり学習者と1:1で放っておかれて会話をする、しかもビデオに撮るといのでかなり戸惑った。

注)後日、実習担当者に確認したところでは、担当者は事前に実習内容の説明を行い、

プログラム評価の資料とするための撮影の許可を求めているのだが、その時点でこの参加者は一人で参加することに戸惑いを見せはしたが、担当者に対して特に異議を申し立てることはなかったという。これは、あえて異議を唱えるというような行動に出ることになりかなり抵抗があったためではないかと推測される。

時間も10分程度ならまだよかったが、30分以上もあり、長かった。他にも参加者がいて、こうすればいいかああすればいいかと話しながらできるのならよかったのだが。もともと話し上手なわけでもないし、何も知らなくて何をどう話せばいいのかわからなかった。相手学習者の子供の頃のことなど聞きたいこともあったが、こんな事聞いてもいいのかと迷い、聞くには至らなかった。うまくできなくて申し訳ないと思っている。

もっと中国のこととか日頃からある程度勉強しておいてうまく誘導するべきだったと思う。自分はこうした活動には向いていないと感じた。

しかし、このときの実習でたまたま餃子教室の講師を担当した学習者と再会することができた。その後も、道でばったり会い、自宅付近だったので暇なら寄って行ってくれるように声を掛けたりした。もう少し知り合いになりたいとも思ったが、そんな余計なことをしていいのかわからなかったし…。実習で相手をしたもう一人の学習者とは、ちゃんとお相手してあげられなかったので退所時に何か心尽くしを、とも思ったが、やはりそんな勝手なことをしてもいいものかと思い、何もできずに別れてしまって心残り。

今後の実習参加について：来月から勤めに出ようと思っているので、時間的に難しくなる。

言葉の通じにくい人とのコミュニケーションについて：面と向かって話すというのでなく、外に一緒に出て買い物に行ったりお茶を飲みに行ったりという自然な場なら、もっと楽しくできるのではないかと。

[資料5]

39期より前は参加動機記入欄なし

[ケースA] 主婦、37歳 参加期間：1992年11月～1993年11月

初回参加経緯：自身の異文化体験より何か中国帰国者の役に立ちたい、かつ、日本語教師養成講座の経験を生かしたいと本人より打診有り

回	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
クラス	38期大人	38期大人	39期大人	41期大人	
実習内容	・話題をめぐるコミュニケーション ・座談会「初対面の話題」	・自己紹介発表会	・餃子の作り方を教える	・話題をめぐるコミュニケーション	
参加動機			(1)日本語教育 (2)帰国者教育 (3)異文化間教育、交流	(1)日本語教育	

[ケースB] 企業勤務、27歳、女性 参加期間：1991年7月～1993年5月

初回参加経緯：日本語教育への興味から大学先輩のセンター講師を通じて参加希望

34期から37期までは、センター内での実習後のボランティア評価は実施しておらず、外出した実習のみの記録である。

回			6回目	7回目	
クラス	34期二世青年	36期二世青年	38期大人	39期大人	
実習内容	・待ち合わせ都心実習	・待ち合わせてボーリング	・中国についてのクイズ ・座談会「職場事情」	・行動達成ビデオ教材作り 「交通・買い物場面」	
参加動機				(1)異文化間教育、交流 (2)日本語教育 (3)中国文化、言語、歴史	

[ケースC] 大学4年、22歳、女性 参加期間：1992年7月～1993年7月

初回参加経緯：大学の授業（異文化適応訓練法）として参加

回	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目
クラス	37期二世青年	37期二世青年	39期二世青年	39期二世青年	40期大人
実習内容	・話題をめぐるコミュニケーション	・日本の歌を教えてください	・ゲーム（UNO） ・話題をめぐるコミュニケーション	・待ち合わせてファーストフード店を利用する	・話題をめぐるコミュニケーション
参加動機			(1)異文化間教育、交流 (2)ボランティア活動 (3)	(1)ボランティア活動 (2)異文化間教育、交流	(1)帰国者問題(センター) (2)異文化間教育、交流 (3)ボランティア活動

[ケースD] 主婦、38歳 参加期間：1993年7月～1994年1月

初回参加経緯：中学校PTAの研修の一環として参加

回	1回目	2回目
クラス	40期大人	41期二世青年
実習内容	・RP（日中の挨拶比較） ・話題をめぐるコミュニケーション	・話題をめぐるコミュニケーション
参加動機	(1)異文化間教育、交流 (2)日本語教育 (3)帰国者問題(センター)	(1)ボランティア活動